ヘッベルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作

石 川 栄 作

》Die Nibelungen《 von Friedrich Hebbel

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Friedrich Hebbel (1813-63) vollendete am 22. März 1860 》Die Nibelungen《-Trilogie : 》Der gehörnte Siegfried《 , 》Siegfrieds Tod《 und 》Kriemhilds Rache《. Als Stoff der Dramatisierung benutzte er hauptsächlich das Nibelungenlied. Es handelte sich aber bei ihm nicht um ein enges Anlehnen an das Epos, sondern um eine Dichtung aus dem Geist des Epos heraus. Der Tragiker entwickelte durch mannigfaltige Bearbeitungen den Geist des mittelalterlichen Heldenepos logisch und psychologisch. Das heißt, er machte die Handlungen konsequent menschlich. Dennoch existiert das mythische Fundament in seiner Trilogie. Dazu gehören Siegfried und Brunhild. Siegfried tritt auch im Drama als solch ein mythischer Held auf, wie in der Rede von Hagene im Nibelungenlied und in der Edda oder Saga erzählt wird. Brunhild besitzt aber das noch auffallendere Merkmal vom nordischen Mythos : sie wurde von einem Greis aus dem Hekla gebracht und wuchs bei der Amme Frigga auf. Als solche mythischen Gestalten transzendieren Brunhild und Siegfried die rein menschliche Welt.

Im Gegensatz zum mythischen Weltzeitalter stehen das heidnische —vertreten durch Hagen, Gunther, Kriemhild und Etzel—und das christliche, das sich in dem Kaplan und vor allem in der Figur des Dietrich verkörpert. Die Eigentümlichkeit der Trilogie Hebbels besteht gerade in dem Zusammenstoß der drei Weltzeitalter. Wobei klar und deutlich ist, dass Hebbel die christlichen Züge gegenüber dem Heldenepos verstärkt hat. Das zeigt sich in den Gestalten wie Pilgrim und Kaplan. Noch wichtiger ist aber die stärkere Betonung des Christlichen durch

die Figur des Dietrich. Hebbel hat Dietrich von Bern speziell als christlichen Herrscher gezeichnet: als Etzel am Ende dem Gast Dietrich sein Reich übergibt, willigt dieser in den Antrag ein, und sagt dabei: 》Im Namen dessen, der am Kreuz erblich!《 (5456) Das ist ein einscheidender Unterschied zum Nieblungenlied. Hebbels Drama endet nicht mit der Katastrophe, sondern mit dem Sieg des Christentums über das Heidentum. Der Tragiker ist nun überzeugt, dass die Geschichte über die Vernichtung hinweg immer wieder zu neuen sinnvollen Welten weiterschreitet.

序

十八世紀半ばに『ニーベルンゲンの歌』の写本が再発見されて[1]以来、ニーベルンゲン伝説はよみがえり、実に多くの詩人・作家たちによってさまざまな芸術形態で伝承されていった。特に十九世紀にはニーベルンゲン伝説の戯曲化が目立っており、その数は枚挙にいとまがないほどである[2]。それら多数遺されている戯曲作品のうちでも特別な光を放っているのが、フリードリヒ・ヘッベル（Friedrich Hebel, 1813-63）の悲劇『ニーベルンゲン』（Die Nibelungen）三部作[3]である。

ヘッベルは少年時代に北海近くの故郷ヴェッセルブーレンで初めてジークフ

1）1755年に『ニーベルンゲンの歌』の写本（現在写本Cと呼ばれている）がフォーアアルルベルクで発見されたのを皮切りに、1769年には写本Bがザンクト・ガレンで、1779年には写本Aがフォーアアルルベルクで発見されるなど、その後も完本・断片を含めて三十数種類の写本が発見された。（拙著：『ニーベルンゲンの歌』——構成と内容——郁文堂1992年2-3頁参照）

2）次の二つの文献における戯曲化の作品目録を参照されたい。
Werner WUNDERLICH: Der Schatz des Drachentödters. Klett/Cotta Stuttgart 1977. S. 21-30.
Siegfried GROSSE/Ursula RAUTENBERG: Die Rezeption mittelalterlicher deutscher Dichtung. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1989. S. 207-18.

3）テクストには 》Friedrich Hebbel: Die Nibelungen. Ein deutsches Trauerspiel in drei Abteilungen. Philipp Reclam Jun. Stuttgart 1974.《 を使用し、邦訳は拙訳である。拙訳を試みるにあたっては、関口存男訳（清華書院1921年、復刻三修社1994年）並びに中島清訳（古典劇大系第14巻独逸篇5近代社1925年）を参照する。

リートとクリームヒルトの物語を読んだと推定されるが、その後その伝説に再会するのは1835年にハンブルクへ移ってからである。彼はそこの女流作家アマーリエ・ショッペの図書館でニーベルンゲン素材を見つけてから[4]、長い間その伝説の戯曲化を考えていたが、しかし実現されるには至らなかった。その戯曲化の執筆に取りかかるきっかけとなったのは、ずっとのちの1853年ウィーンのブルク劇場において彼の妻クリスティーネがエルンスト・ラウパッハの戯曲『ニーベルンゲンの財宝』[5]でクリームヒルト役として登場したことである。この演劇によって少年時代からの夢が復活し、彼は1855年10月にその戯曲化に着手し、紆余曲折を経たのち、五年後の1860年３月22日に三部作――第一部『不死身のジークフリート』、第二部『ジークフリートの死』及び第三部『クリームヒルトの復讐』――を完成させたのであった[6]。その第一部と第二部はフランツ・ディンゲルシュテット監督の下で1861年１月31日にワイマールで上演され、三部作全体は1861年５月16日／18日同様にワイマールで作者の面前で初演された[7]。成果はいずれも輝かしいもので、その後1862年にはベルリンでも、1863年にはウィーンでも好評を博した。また1862年にはテクストがハンブルクのホフマン＆カンペ社から出版され、それにより翌1863年11月７日――病没する約１ヶ月前――にはシラー賞を受賞している。

完成した戯曲作品としては最晩年に属するこの『ニーベルンゲン』三部作の創作過程については、遺稿の「読者に寄せて」[8]の中で明らかにされており、それによれば、「この悲劇作品は『ニーベルンゲンの歌』の劇的素材を実際の舞台にのせるという目的のもとに書かれた」もので、「悲劇の要因はすべて原作の叙事詩によって与えられ」、自分の「課題は今やそれを戯曲的に組み立て、必要なところで詩的に活力を与えることであった」という。しかし、ヘッベルは素材の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』をそのまま翻案したわけではなく、戯曲化に伴ってかなりの改作を施していることは言うまでもない。必要に応じ

4）Vgl.Norbert MÜLLER: Die Nibelungendichter Hebbel und Wagner. Frohn Verlag Essen 1991. S.21.

5）Ernst Raupach: Der Nibelungen-Hort. Hoffmann und Campe Hamburg 1834.

6）上記レクラム版テクスト巻末の解説190頁参照。なお、以下の叙述もこの解説に拠るところが多い。

7）谷口茂編著：内なる声の軌跡――劇作家ヘッベルの青春と成熟――冨山房1992年324-7頁参照。

8）上記レクラム版テクスト巻末の解説191-2頁参照。

ては北欧伝承も取り入れ、また全体の悲劇を三部構成にして、新たな登場人物をも導入することによってヘッベル流に作り直している。その結果、中世の英雄叙事詩とは著しく異なった世界観が展開されていることもまた事実である。ヘッベルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作は、一体、『ニーベルンゲンの歌』と比較してどのような特徴を示しているのであろうか。本稿では特に素材の中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』と比較しながら、必要に応じて北欧伝承をも引き合いに出しながら、ヘッベルの戯曲『ニーベルンゲン』三部作の特質を探り出すことにしたい。

第一部『不死身のジークフリート』

Ⅰ．ライン河畔ヴォルムスの城――第１場～第２場――

第一部『不死身のジークフリート』は４場から成る一幕物であり、それぞれ五幕から成る第二部『ジークフリートの死』及び第三部『クリームヒルトの復讐』に比べるとかなり短い。ここではニーデルラントの英雄ジークフリートがライン河畔ヴォルムスに到着し、ブルグント族のグンター王と契約を交わすまでの経緯――ニーベルンゲン伝説ではよく知られたあらすじ――が取り扱われているが、その中にはジークフリートの冒険譚とブルンヒルトの物語も織り込まれていて、この第一部はまさに三部作全体の序幕（Vorspiel）の役割を果たしていると言ってもよかろう。

その第一部冒頭の舞台はライン河畔ヴォルムスのブルグント族グンター王の居城である。復活祭の早朝、ブルグント族の面々が居並ぶ中でハーゲンが狩りを催さないことに不平を述べる中、グンター王が退屈しのぎに何かおもしろいことを話して聞かせるよう楽人フォルケールに要求することからあらすじは展開し始める。ハーゲンはこの戯曲ではグンター王の伯父として登場しているが、とりわけ重要な役割を果たす人物であることは『ニーベルンゲンの歌』と異なるところはない。中世叙事詩においてと同様、ハーゲンが竜退治の英雄ジークフリートについてすでに聞き及んでいることは、その場面での会話（91-4）からも明らかである。ださすがの知恵者ハーゲンでも世界の北の果てに住むブルンヒルトについては何も知らないことになっている。その顔にはルーネ文字が書かれている（127）というブルンヒルトについて語るのが楽人フォルケールである。この人物は『ニーベルンゲンの歌』では後編になってようやくその本来の楽人ぶりと勇猛ぶりとを発揮しているのに対して、ヘッベルの作品ではこの第一部冒頭ですでに重要な役割を演じ、これまで一度も話したことのない

北方の美しい女王ブルンヒルトについて次のように語るのである。

・・・Sie wohnt
In einer Flammenburg, den Weg zu ihr
Bewacht das tückische Geschlecht der Zwerge,
Der rasch umklammernd quetschend Würgenden,
Die hören auf den wilden Alberich,
Und überdies ist sie begabt mit Kräften,
Vor denen selbst ein Held zuschanden wird. (141-7)
・・・
Wer um sie wirbt, der wirbt zugleich
Um seinen Tod, denn führt er sie nicht heim,
So kehrt er gar nicht wieder heim, und ist
Es schon so schwer, nur zu ihr zu gelangen,
So ist es noch viel schwerer, ihr zu stehn.
Bald kommt auf jedes Glied an ihrem Leibe
Ein Freier, den die kalte Erde deckt,
Denn mancher schon zog kühn zu ihr hinab,
Doch nicht ein einziger kam noch zurück ! (148-56)

・・・彼女は
炎の城に住んでいる。そこに通ずる道を
悪賢い侏儒の一族が見張っている。
急にしがみつき、押しつぶして首を絞める一族で、
彼らを統率しているのが獰猛なアルベリヒだ。
そしてさらに彼女は英雄をも
打ち負かすという力を具えている。
・・・
彼女に求婚する者は、同時に
自らの死を求めるようなもの。彼女を連れ帰ることができねば、
求婚者は二度と故郷へ帰ることができないのだから。
それに彼女のところに辿り着くのも困難なことであるが、
彼女に対抗することはもっと困難なことだ。
求婚者が彼女の身体の一部に触れでもしたら、

その者は冷たい大地に覆われることになる。
これまでもすでに多くの者が彼女のもとに出かけて行ったが、
誰一人として戻って来た者はいないのだ！

『ニーベルンゲンの歌』におけるプリュンヒルトもまた「勇猛なる武人を相手として、愛を賭けて、三種競技を行い、求婚者はその一種目たりと敗れれば、首を失うことになる」(326-7) という女豪傑として登場しているが、ヘッベルの戯曲ではさらに北欧伝承の要素が一段と強められて、「ブルンヒルトの城は炎に囲まれ」(142)、「その城に通ずる道をアルベリヒの侏儒一族が見張っている」(142-5) ということになっている。そして「彼女に対抗するのはもっと困難である」(152) という女豪傑であればこそ、グンター王もただちに彼女に求婚することを決意する (157-9) のであり、ヘッベルにおけるグンター王の決意は『ニーベルンゲンの歌』においてよりもさらに強くなっていると言ってもよいであろう。

このようにグンター王がちょうどブルンヒルトへの求婚を決意したところへ、ニーデルラントの英雄ジークフリートが到着する。そのときハーゲンはジークフリートの英雄譚——皮膚は角質化し、腰には名剣バルムンクを帯び、ニーベルンゲン財宝の所有者であり、霧の頭巾をも携えているという話 (173-8) ——を簡単に語るが、これは明らかに『ニーベルンゲンの歌』(86-101) にならったものである。また到着のジークフリートが十二人の従者を従えている (163) 点も『ニーベルンゲンの歌』(59) と同じであれば、ジークフリートがクリームヒルトの愛を求めてこの国にやって来た——そのことはあとで分かってくる——にもかかわらず、最初のうちは力ずくでそのブルグントの国を奪い取ろうと、攻撃的な態度を取っている (182-220) 点も素材の叙事詩 (106-14) と同じである。ただ『ニーベルンゲンの歌』ではジーフリトの挑戦的な態度にオルトウィーンが抵抗している (116-7) のに対して、ヘッベルの作品ではハーゲンの実弟ダンクヴァルトが反抗的な態度をとっている。ダンクヴァルトがジークフリートの挑戦を竜の血による不死身の肌ゆえの態度だ (221-2) と言って悪口を言えば、ジークフリートは「竜の血を浴びたときに一枚の菩提樹の葉が肩に落ちてきた」(226-7) ことを打ち明けて、相手の臆病風に吹かれた態度を逆に揶揄(やゆ)する。それでもやはり相手方が自分の堅い皮膚を恐れていることを悟って、ジークフリートは自ら考えを変えて、城庭で石投げを競うことを提案する (238-43)。この石投げ競技は『ニーベルンゲンの歌』における130詩節と133詩節の叙述に由来するものと考えられるが、『ニーベルンゲンの歌』ではジー

フリトが歓迎された後の競技であるのに対して、ヘッベルの戯曲では歓迎前の競技になっている。このような多少の相違はあれ、ヘッベルの作品においてもグンター王の方は素材の叙事詩においてと同様に最初からジークフリートを歓迎する姿勢である。石投げを競ったあとは一緒に飲むことをグンター王が提案すれば、ジークフリートも喜んでそれに賛成する。さっそく石投げの準備に取りかかるが、その競技の様子は実際に舞台の上では演じられずに、続く第3場でクリームヒルトとその母の対話によって表現されることになる。

Ⅱ．クリームヒルトの「鷹の夢」――第3場――

その第3場はいきなり「その鷹というのはお前の夫なのじゃ」(266) という母后ウーテの台詞で始まっている。あとの台詞 (324) からも分かるように、姫クリームヒルトは前夜不吉な「鷹の夢」を見て、それを母后に語ったのであろう。母后のその言葉に対してクリームヒルトは次のように答える。

・・・Nicht weiter, Mutter,
Wenn du den Traum nicht anders deuten kannst.
Ich hörte stets, daß Liebe kurze Lust
Und langes Leid zu bringen pflegt, ich seh's
Ja auch an dir und werde nimmer lieben,
O nimmer, nimmer！　(266-71)

・・・母上様、それ以上はおっしゃらないで。
その夢に別の解き方をしようとなさらないのなら。
いつも聞いていますが、恋の歓びは短く、
苦しみは長いもの。あなたを見てもそれは
よく分かります。だから私は決して恋などしませんわ。
ああ、決して、決してしませんわ！

このような娘の言葉に対して、母后は次のように言って娘を教え諭す。

・・・Kind, was sagst du da?
Wohl bringt die Liebe uns zuletzt auch Leid,
Denn eines muß ja vor dem andern sterben,
Und wie das schmerzt, das magst du sehn an mir.

Doch all die bittren Tränen, die ich weine,
Sind durch den ersten Kuß vorausbezahlt,
Den ich von deinem Vater einst empfing.
Auch hat er, eh er schied, für Trost gesorgt,
Denn wenn ich stolz auf tapfre Söhne bin,
Und wenn ich dich jetzt an den Busen drücke,
So kann's doch nur geschehn, weil ich geliebt.
Drum laß dich nicht durch einen Reim erschrecken :
Ich hatte lange Lust und kurzes Leid. (271-83)

・・・娘よ、お前はなんてことを言うの？
確かに恋は最後には苦しみをももたらす。
どちらか一方が先に死なねばならないのだから。
それがどんな悲しみかは、私でよくお分かりのはず。
でも私が流すこれらすべての涙は、
私がかつてお前の父さんから受けた
最初の接吻によって先払いがしてあったのじゃ。
お父様も、亡くなる前に、慰めを残しておいてくれた。
私が勇敢な息子たちを誇りに思うことができて、
今こうしてお前を胸に抱くことができるのも、
私が恋をしたからこそ起こりうることだよ。
だからお前はそのような言葉を恐れてはいけません。
私の歓びは長く、苦しみは短かったのじゃ。

この母后と娘クリームヒルトの対話が『ニーベルンゲンの歌』第一歌章における「鷹の夢」(13-9) に直接基づくものであることは明らかである。対話の核心にある「恋は結局悲しみをもたらす」(272) という言葉にしても、『ニーベルンゲンの歌』における言葉 (17) と逐語的に同じと言ってもよいほどである。ただヘッベルにおける母后ウーテの言葉は、『ニーベルンゲンの歌』よりもより人生論風な内容を示している。「失うくらいなら、持たない方がずっとよいではありませんか！」(284) と言うクリームヒルトに対して、母后ウーテは「しかしこの世で失わずに済むものがありえようか！」(285) と答えて、娘にこの世の無常を説いて聞かせる。無常であればこそ、自分に気に入ったものがあれば、皆と同じように、それをつかみとるよう、教え諭す (291) のである。ク

リームヒルトはこの母后の説得に言葉を返そうと思いながら、ふと窓の外を見て、言葉を切ってしまう。城庭に立つ一人の見知らぬ勇士の姿に、彼女は顔を赤らめ、心を乱してしまったのである。その娘の狼狽ぶりを見て母后は「あの鷹なら鷲を恐れる必要はない」(321-2) などと言って、娘心を駆り立てる。その勇士がニーデルラントのジークフリートであることは言うまでもない。ジークフリートは今や城庭でブルグントの勇士たちと石投げ競技を始めようとしているところである。その競技の様子が今やこの場で母后と娘の会話によって表現されるのである。

まず最初にジークフリートと石投げを競ったのが若きギーゼルヘア、二番手がゲーレノートであったが、いずれも客人に負けてしまう。順番通りにゆけば、次は主馬頭(しゅめのかみ)ダンクヴァルトの番であったが、グンター王が恐ろしい見幕でダンクヴァルトを押し退けて、自らが岩を投げる。さすがにグンター王はゲーレノートの二倍も遠くへ投げはしたものの、それでもやはりジークフリートの方がそれを上回った。いよいよ最後に躍り出たのがハーゲンである。ハーゲンはそれ以上投げようにも場所がないほど遠くへ石を投げた。しかしそのあとジークフリートの投げた岩は城の塔を越えて、ついにはライン河の中へ飛び込んでしまった。ダンクヴァルトと同様、フォルケールも出番なくあきらめて、一同が握手をしているところを見れば、石投げは終わってしまったようである。この競技のさまを眺めていた母后と娘の方も祈祷の時刻になったので退場する。

Ⅲ．ジークフリートとグンター王の契約——第4場——

こうしてジークフリートは石投げ競技のあとグンター王から改めて歓迎の挨拶を受け、客人としてヴォルムスに滞在することになる。素材の叙事詩とほぼ同じ展開であるが、しかし『ニーベルンゲンの歌』ではジーフリトはヴォルムスに長く滞在しているうちにも、姫クリエムヒルトへの求婚の意志を打ち明けられずに恋の苦しみを味わい続けるのに対して、ヘッベルにおけるジークフリートは石投げ競技のあと単刀直入にクリームヒルトへの求婚の意志をその兄グンター王に伝えている。それに対してグンター王は仲人が必要とあれば自らがその任に当たることを申し出るが、ただそれには条件があって、次のように答える。

・・・Wenn's dir aber
Am Werber fehlt : ich leiste dir den Dienst,
Nur mußt du mir den gleichen auch erweisen,

Denn Kriemhild, meine Schwester, darf nicht ziehn,
Bevor hier Brunhild ihren Einzug hielt. (470-4)

・・・仲人役が
いないのなら、私がその務めを果たしてあげよう。
ただそなたも私に同様のことをしてくれなくてはならない。
ブルンヒルトがここの城に入る前には、
私の妹クリームヒルトはよそへやるわけにはいかないのじゃ。

グンター王が北方の乙女ブルンヒルトに求婚するつもりであることを知ったジークフリートは、『ニーベルンゲンの歌』と同じように、ただちにそれを思いとどまるよう忠告する。ジークフリートの言葉によれば、彼女は「血管の中で溶けた鉄が煮えたぎっている」(477) ような女性で、「戦いで彼女に打ち勝つことのできる者は、一人の男を除いては誰もいない」(479-80) という。「その一人の男、つまり、この私の手から彼女を受け取るのがいやなら、思いあきらめるしかない」(506-8) と忠告するとともに、自らが一緒について行ってやることを申し出るのである。「どのように事を運ぼうとしているのか」(515) とのハーゲンの質問に、ジークフリートは石投げ、幅跳びそして槍投げという三つの困難な試練に打ち勝つ作戦を打ち明けて言うところによると、要するに、『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように、グンター王は身構えをするだけで、実際にはジークフリートが石を投げて、しかもグンター王をかかえたままそのあとを追って跳ぶというものである。それを実現させるのが、すなわち、「隠れ頭巾」(Nebelkappe, 525) であり、ここで重要なことは、ヘッベルの戯曲におけるジークフリートは以前にも実際それを使って彼女の国に出かけたことがあることをはっきりと口にしていることである。『ニーベルンゲンの歌』にもその痕跡はわずかながら窺い知ることはできる (vgl. 331) が、しかし、ヘッベルの作品ではジークフリートは「結婚の申し込みのためではなく、自分の姿は見られずに、少しばかり様子を眺めた」(527-8) ということになっている。皆が驚いた様子で不思議に思っているので、ジークフリートはグンター王に催促されたこともあって、その折りのことを皆に長々と話して聞かせるのである。『ニーベルンゲンの歌』ではハゲネが語るジーフリトの冒険譚(86-101) を、この作品ではジークフリート自らが語るのであり、そこにヘッベルの特徴があると言えよう。長々と語るジークフリートの冒険譚は、次のように三つにまとめられよう。

まず第一の冒険はニーベルング族の財宝獲得に関するものである。戦いの功名心に駆られて冒険の旅に出かけた最初の日、ジークフリートはある洞穴の入口で二人の若い勇士が激しく争っているところに出くわした。二人はニーベルング王の息子たちであったが、父王――あとで聞いたところによると、二人は父王を叩き殺したのだという――を埋葬したあとで、その遺産をめぐって争っていたのである。二人のまわりには宝石の山が築かれ、その中には古い王冠や奇妙な形の角杯、そして何よりもまず名剣バルムングも見えた。そのうえ洞穴の中からは黄金が赤々と光り輝いていた。二人の勇士はジークフリートを見ると、第三者としてその財宝を分配してくれるようにと要求したので、ジークフリートはその役目を引き受けて果たしたところ、二人は互いに自分の分け前が少ないと言ってあばれ出した。そこでジークフリートは要求されるままに再度両方の財宝をかき混ぜて二分したが、二人はますます怒り出し、すばやく剣を抜いてジークフリートに向かって斬りつけてきた。ジークフリートは自らの剣を抜く暇もなかったので、そばにあったバルムングの剣をつかんで自らの身を守ろうとしたところ、二人は盲目状態で鉄に向かって突き進む猪のように、互いに刺しちがえてしまった。こうしてジークフリートはそこにあったすべての財宝の持ち主となったのである。

続く第二の冒険は竜退治に関するものである。ジークフリートはそれからその洞穴の中へ入って行こうとしたところ、驚いたことには入口を見失ってしまった。大地の中から突然土塁が盛り上がってきたかのように見えたのである。ジークフリートは道を切り開こうとしてそれに剣を突き刺すと、水ではなく血が流れ出てきて、ピクリと身動きまでする。ジークフリートは土塁の中に蛇でもいるのかと思ったら、何と土塁全体が一匹の竜なのであった。竜が身体を起こさないうちに、ジークフリートはすばやく竜に飛び乗り、青い頭を後ろからバルムングの剣でもって叩きつぶしてしまった。ジークフリートはそのあと、まるで岩だらけの山でも切り開くように、その巨大な竜の肉や骨を叩き割って、ようやくのことで洞穴の入口まで辿り着き、洞穴の中へ足を踏み入れるや否や、丈夫な腕にしがみつかれたように感じた。その腕はジークフリートの目には見えないのに、ほとんどジークフリートの肋骨を押しつぶしてしまいそうな力であり、まるで空気に抱き締められたような感じであった。それがあの乱暴な侏儒アルベリヒであった。ジークフリートはこの怪力と激しく格闘しているうちに、ついに侏儒は姿を現した。格闘の最中になんのはずみでか侏儒の霧の頭巾を脱がせてしまったようで、侏儒は力を失って、その場に倒れてしまったのである。ジークフリートは侏儒を虫けらのように踏みつぶしてしまおうと

したが、秘密を教えてくれるというので、命だけは助けておいた。その秘密とは、まだ湯気が立っている限り竜の血には魔力が秘められているということであった。ジークフリートはこうして竜の血を浴びて、不死身の肌となったのである。

以上、第一の冒険と第二の冒険は『ニーベルンゲンの歌』においてもハゲネの語り（86-101）という形で伝承されており、ヘッベルがその英雄叙事詩を素材に用いたことは容易に推測されるが、最後の第三の冒険は『ニーベルンゲンの歌』には見出されない。ジークフリートは、すなわち、竜の血の一滴がはねて彼の唇にかかると、たちまち頭上でさえずる鳥の言葉を理解できるようになったのである。竜の血が舌に触れた瞬間に鳥の言葉が分かるようになるのは、ドイツの伝承ではなく、北欧の伝承[9]によるものであり、ヘッベルはここで北欧の伝承をも取り入れながら独自の世界を構築しているのである。ジークフリートの周辺をおおっていた菩提樹の老木の中からさえずっていたのは、小鳥やカラス、コガラスそしてフクロウであったが、それらがしきりと言い争っている言葉の中にはブルンヒルトの名前とともにジークフリートの名前も聞かれた。話し声が雑然として入り乱れていたので詳細は分からないが、どうやら一つの冒険がジークフリートを待ち受けているようである。カラスがまず先に飛び立ち、それにフクロウが続いたので、ジークフリートはその二羽の鳥のあとを追いかけて行くと、やがて炎の海が現れ、その向こう岸には一つの城が見えた。城は白熱した金属のように青白い光を出して煌々（こうこう）と輝いていた。ジークフリートは立ち止まった。するとフクロウが「バルムングを鞘から引き抜いて、頭上で三度振り回すのだ！」（635-6）と言うので、言われた通りにすると、たちまち海は消え失せた。今や城の中からは人声がして、城壁の上には人影も見え始め、一人の気高い乙女が見下ろしていた。「あれが花嫁だ！さあ、隠れ頭巾を脱ぐのだ！」（641-2）とフクロウが叫んだので、気づいて見れば、ジークフリートはそのときまで知らずに隠れ頭巾を被ったままだったのである。二羽の鳥が隠れ頭巾をつかみ取ろうとしたので、ジークフリートはそれを両手で押さえた。なぜそうしたかというと、ジークフリートがはっきりと言っているように、「城壁の上に立つブルンヒルトは、大変美しかったものの、自分の心を

9）『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」（谷口幸男訳：エッダ――古代北欧歌謡集　新潮社1973年138-43頁）及び『ヴォルスンガ・サガ』（菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説――ヴォルスンガ・サガ　東海大学出版会1979年56-8頁）を参照のこと。

動かすまでには至らなかった」(647-8) からである。ジークフリートは、すなわち、「そこで求婚する気になれないと感じた者は、挨拶をすべきではない」(649-50) と思ったからである。

このようにヘッベルの戯曲ではジークフリートは確かにブルンヒルトの国を訪れたものの、彼女と婚約もしていなければ、彼女と一言も言葉を交わしていないということになっている。この点にヘッベルの独創性があると言えよう。いずれにしても姿を見られずに立ち去ったジークフリートは、「城の様子や彼女の秘密、そしてそこまでの道を知っている」(651-2) ので、グンター王を喜んで案内しようと申し出るのである。フォルケールはそのような策略を用いることが気に入らず、ゲーレノートとともに反対するが、グンター王は「それは少しも恥ずかしいことではない。泳いで渡れない所へは船で渡る。こぶしで間に合わないときには剣を用いるのと同じことだ」(658-62) と言って、ブルンヒルトの国へ出かけることを決意する。こうしてグンター王は、ブルンヒルトをこの国に連れて来た暁にはクリームヒルトをジークフリートの妻にすることを約束し、両者の契約が成立するのである。

第二部『ジークフリートの死』

Ⅰ．イーゼンラントのブルンヒルト――第一幕――

以上のように第一部の展開を見てくると、ジークフリートは神話的世界からやって来た英雄であることが理解できるが、ジークフリートと同じように神話的世界に属しているのがブルンヒルトである。第二部において登場する彼女の乳母にフリッガという名前がつけられていることからもそれは明らかである。その乳母にはヘッベルの作品ではブルンヒルトの生い立ちの秘密を語るという役割が与えられており、この乳母によってブルンヒルトの生い立ちが明らかにされるのである。

第一幕第１場でその乳母フリッガが語って聞かせるところによると、イーゼンラントの女王が姫を産むと同時に息を引き取ったある日のこと、フリッガたちが女王の亡骸のそばでその夜を明かしていたところへ、思いがけなく火の山から一人の老人が現れ出て、ルーネの文字を刻み込んだ板を添えてフリッガに一人の乳飲み子を預けたのであった。その老人の髪は雪のように白く、しかも女にもめずらしいくらいの長さで、大きな外套のように身体を包み込み、それでもまだ後ろへ引きずられていた。フリッガがあとで気がついて振り返って見ると、その老人はすでに影も形も見えなかったという。

さて、その老人がフリッガに預けた乳飲み子は、亡き女王の冠へ手をのばしたので、それを被せてみると、不思議にもぴったりと合った。さらに不思議なことには、その乳飲み子は亡き女王の腕に抱かれていた姫と瓜二つで、ただ息をしているというだけの違いであった。すなわち、姫はたちまち息を引き取ってしまったのである。ちなみに、国王も長い間子供が授かるのを楽しみにしていたが、その姫が産まれる一ヶ月前に突然他界してしまったという。

こうしてイーゼンラントの国では姫と交換するように一人の乳飲み子が授けられたので、翌日僧侶がその子に洗礼を施そうとしたところ、聖水がその子の額にかかる前に、僧侶はたちまち手が動かなくなったという。すぐに二人目の僧侶を呼び寄せたところ、今度は聖水の礼は難なく済んだが、いざ祝福を施そうとすると、僧侶はたちまち唖(おし)になって、それきり言葉が話せなくなったという。三人目の僧侶を見つけ出すのに長い時間がかかったが、遠くからやって来たその僧侶も、洗礼が済むや否や、ひっくり返って、二度と起き上がることができなくなったという。その乳飲み子の方は成長し、丈夫になった。しかもその娘のすることが、ルーネ文字の板に予言されていたように、吉凶のしるしとなった。その娘が、すなわち、ブルンヒルトであり、故郷は神々の住むヘクラの山で、母がいるとしたらそのノルンやヴァルキューリエンの中にいるのであろう。このようなことを乳母フリッガはブルンヒルトに長々と話して聞かせたのである。

以上のようなブルンヒルト像は従来のドイツにおけるニーベルンゲン伝説においてはもちろんのこと、北欧のニーベルンゲン伝説においても伝承されていない。ここにおけるブルンヒルト像は特に北欧神話化されて、ヘッベルの独創性がよく窺える箇所である。しかし、そのあとの展開はまた素材の『ニーベルンゲンの歌』に忠実に従っている。すなわち、そのイーゼンラントのブルンヒルトのもとへグンター王が求婚のためにやって来たのである。ただ『ニーベルンゲンの歌』では随行してきた者がジーフリトとハゲネのほかにダンクワルトであったが、ヘッベルではジークフリートとハーゲンのほかにフォルケールである。ブルンヒルトがまず最初にジークフリートに挨拶をすると、ジークフリートは次のように答える。

Auch tust du mir zu viel der Ehre an,
Mich vor dem König Gunther zu begrüßen,
Ich bin hier nur sein Führer. (799-801)

グンター王をさしおいてまず私にご挨拶とは、
まことに恐縮の至りです。
私はここへはただ王の案内をして来ただけです。

求婚者がグンター王であることを知ったブルンヒルトは、グンター王に心構えを聞いてから、求婚のための決闘について「敗れた者は、ただちに命はなく、その従者たちも同様の結果となる」(808-9) ことを伝えて、覚悟を促す。ハーゲン (821) に続いて、ジークフリートもグンター王の比類なき名誉をほめ称えて (822-5)、ブルンヒルトに決闘を要求すると、彼女はしばらくの間、時間の歩みというものがない自らの世界について語り始める。表面上は『ニーベルンゲンの歌』と同じ経過を辿りながら、作品の奥底ではヘッベルの独創的世界が展開されていることが理解されよう。ブルンヒルトは自らの神話的世界を語りながら、一時は放心状態に陥っていたが、乳母フリッガに促されると、ただちに決闘の準備を始める。ジークフリートは船の後片付けをしてくると言って、その場を退く。ブルンヒルトも退きながら勇士たちに決闘を呼びかけたところで幕が下りる。その決闘のさまは第一部の石投げと同様に舞台の上では演じられないことになっている。戯曲化に伴う結果と言ってもよいであろう。

Ⅱ．二組の結婚――第二幕――

第二幕はヴォルムスの宮廷で料理番ルーモルトがイーゼンラントからの客人を出迎える準備にいそしんでいる場面でもって始まっている。その第1場でルーモルトがギーゼルヘアと交わす会話から、ジークフリートがグンター王の案内をしてイーゼンラントへ向かう途中、リューデガストとリューデゲールの攻撃を阻止したうえに彼らを捕虜にしたことが分かる。『ニーベルンゲンの歌』第4歌章における同様のエピソードをヘッベルは巧みにこの場面の会話の中に取り入れている。ジークフリートはこのような英雄だから、今回のブルンヒルトへの求婚の旅もうまくいくだろうとギーゼルヘアがルーモルトと一緒に話しているところへ、ゲーレノートが現れて、ライン河の下流から船がこちらに近づいていることを報告する。花嫁ブルンヒルトを乗せた船であることは言うまでもない。

その船に先立って、ジークフリートが先触れの使者としてヴォルムスの宮廷に到着する。『ニーベルンゲンの歌』第9歌章に由来する展開である。ただヘッベルの戯曲ではこの場面で初めてジークフリートは母后ウーテとクリームヒルトに対面することになっている。戦いでは勇敢なジークフリートも、この母娘

に対面するにあたっては言葉に窮してしまう。クリームヒルトの方も「このような気高い使者」(1048) にどのような贈り物をしたらよいか分からずに、あわてているうちにハンカチを落としてしまう。ジークフリートはそれを拾って、自分への贈り物に所望する。クリームヒルトは当然のことながら恥じ入るが、それに対してジークフリートは次のような言葉で答える。

Kleinodien sind mir, was den andern Staub,
Aus Gold und Silber kann ich Häuser baun,
Doch fehlt mir solch ein Tuch. (1051-3)

ほかの人には塵に思えても、私には宝物です。
金や銀は建物ができるほど持ってはいますが、
私にはこのようなハンカチがないのです。

このあとのクリームヒルトの言葉によれば、そのハンカチは彼女自身が織ったもの (1054) である。「それを心から与えて下さいますか」とジークフリートが尋ねると、クリームヒルトも「喜んで差し上げます」(1055) と応じる。『ニーベルンゲンの歌』においては見出されない、ヘッベル自身の独創による小さな場面ではあるが、両者の息がぴったりと合っているさまが簡潔に表現されている。この場面は『ニーベルンゲンの歌』第5歌章においてジーフリトが初めてクリエムヒルトに出会う場面 (279-304) に匹敵するほどの効果を上げており、ヘッベル自身の独創的な、巧みな手腕を表す場面であると言ってもよいであろう。

やがてラッパの音とともにグンター王一行がヴォルムスの宮廷に到着する。『ニーベルンゲンの歌』ではこの花嫁歓迎の場面では穏やかな挨拶のさま (579-95) が展開されているのに対して、ヘッベルの戯曲では最初から穏やかならぬ雰囲気である。ハーゲンがジークフリートに語るところによると、グンター王は花嫁ブルンヒルトにいまだに接吻一つさえできない (1075-7) 状態であるという。ブルンヒルトは初めのうちは乙女にふさわしいような抵抗をしていたが、グンター王を親指一本ではじき飛ばすことができると分かるや否や、急にあばれ出して、グンター王の襟首をつかんで、ライン河の中へ突き落とす有様である (1079-87)。このような花嫁に随行してきた乳母が花嫁にいろいろと余計な悪知恵を与えているようで、ハーゲンには花嫁以上にこの乳母が恐ろしいという。ブルンヒルトは母后ウーテとクリームヒルトからやさしい歓迎の挨拶

を受けて初めてグンター王と夫婦の契りを結ぶ気になる。クリームヒルトにすみれの花を摘み取ってもらって、ブルンヒルトは初めて花の香りというものを体験する。この新しい姉上に向かってクリームヒルトも「どうぞこの花を、この国にはまだあなたを幸福にするものが目の前にたくさんあるというしるしにしてください」(1143-5) というやさしい言葉をかける。両者の関係はこれからうまくいくかに見えたが、しかしジークフリートがグンター王に約束を思い出させて、クリームヒルトとの婚約が成立するや否や、ブルンヒルトはジークフリートとクリームヒルトの間に割って入り、姉として一言、次のように不平を述べるのである。

・・・Wie darfst du's wagen,
Die Hand nach ihr, nach einer Königstochter,
Nur auszustrecken, da du doch Vasall
Und Dienstmann bist！　(1219-22)

・・・そなたは臣下であり、
従者の身分であるのに、
国王の娘に求婚しようなどと、
どうしてそんなことができるのですか！

これに対してグンター王が「彼は天下に並びない豪傑であり」(1223-4)、「そのうえ莫大な財宝の持ち主である」(1227) と説明しても、ブルンヒルトは「それが妹を与える理由になりますか」(1228) と怒る。そこでグンター王が「彼は私と同様に国王である」(1231) と言えば、「でもその彼は召使になったのでしょう？」(1231-2) と皮肉を言う。グンター王は彼女が自分の王妃になったのちにこの謎を打ち明けようと約束するが、ブルンヒルトは「秘密を知らない限りは妃になりません」(1234) とまで言い切る。母后が彼女を宥めると、ブルンヒルトは、「お誓いした通り、教会までは彼に従いましょう。そして喜んであなたの娘になりましょう。しかし彼の妻にはなりません」(1237-9) と答えて、ひとまず礼拝堂へと入って行くのである。

一方、ジークフリートの方は自らが一国の王であることのあかしとして、クリームヒルトにニーベルンゲンの財宝を贈るために、そのあとすぐにその財宝を侏儒たちに運ばせる。このクリームヒルトへの後朝(きぬぎぬ)の贈り物については『ニーベルンゲンの歌』ではずっとのちにジーフリトが暗殺されたあと (1116) で記

述されているが、その描写をヘッベルはこの場面に挿入していると考えてもよいであろう。

さて、夜になると宴会が催される。ブルンヒルトは、やがてハーゲンがジークフリートに語る言葉によれば、その宴席においてもただ食卓についたまま泣いているのみである。ハーゲンはジークフリートに目配せを送って、彼を部屋の外に連れ出して、再びジークフリートの手助けを依頼する。ブルンヒルトをもう一度打ち懲らしめてほしいと願うのである。その策略を次のように説明する。

・・・Der König geht mit ihr
Ins Schlafgemach. Du folgst ihm in der Kappe.
Er fordert, eh sie sich das Tuch noch lüftet,
Mit Ungestüm den Kuß. Sie weigert ihn.
Er ringt mit ihr. Sie lacht und triumphiert.
Er löscht, als wär's von ungefähr, das Licht
Und ruft : So weit der Spaß und nun der Ernst,
Hier wird es anders gehn, als auf dem Schiff !
Dann packst du sie und zeigst ihr so den Meister,
Bis sie um Gnade, ja ums Leben fleht.
Ist das geschehn, so läßt der König sie
Zu seiner untertän'gen Magd sich schwören,
Und du entfernst dich, wie du kamst ! (1307-19)

・・・国王が彼女と一緒に
寝室に入る。お前は頭巾を被って彼のあとに従う。
彼女が布団をまくり上げようとするときに、国王は
強引に接吻を迫る。彼女は拒絶するであろう。
国王は彼女と格闘するが、彼女が勝って笑うことだろう。
国王は、偶然消えたように、明かりを消して、
叫ぶ。「遊びはこれまで。これからが本気じゃ。
ここでは船の中とは違うぞ！」と。
それからお前が彼女を組み伏せて、彼女を懲らしめるのだ。
彼女が恵みと命を願い出るまで。
それが済んだら、国王が彼女に

従順な女になることを誓わせる。
そしたらお前は、もと来たように、立ち去るのだ！

いつの間にかグンター王もその場にいて、ハーゲンとともにジークフリートに援助を頼む。ジークフリートは気が進まずに拒み続けるが、ハーゲンの執拗な説得に説き伏せられて、ついに承諾してしまう。第二幕はこの承諾した場面で終わっている。

Ⅲ．両王妃の口論――第三幕――

続く第三幕は、第二幕の最終場面でハーゲンが説明した通りのことが実行されて、ジークフリートがグンター王に代わってブルンヒルトをベッドの上で取り押さえたことが前提となっている。その格闘の際にジークフリートがブルンヒルトから帯を奪い取って来たことは、翌朝礼拝堂へ向かう途中のクリームヒルトとジークフリートとの対話から次第に明らかとなってくる。ただ『ニーベルンゲンの歌』ではジーフリトがプリュンヒルトの帯を妻のクリエムヒルトに与えたのであった（680）が、ヘッベルの戯曲ではジークフリートが無意識的にその帯を懐に入れて持ち帰ったことになっている。その帯をクリームヒルトは翌朝、部屋の中で見つけ(1451)、ニーベルンゲンの財宝の一つだと思い(1453-4)、夫を喜ばせるために急いでその帯を締めて出てきた。ところが、妻クリームヒルトがそれをしきりに気づかせようと努めても、夫ジークフリートは一向にそれに気づかなかったばかりか、それを目にしたのちもなおそれには見覚えがない（1456）と言うばかりである。「くちゃくちゃになって床の上に落ちていた」（1462）ことを聞き知って、ようやくジークフリートは昨夜の格闘の場面を思い起こして、それがブルンヒルトの帯であったことを悟るのである。「どのようにしてこの帯を手に入れたのですか」（1475）と尋ねるクリームヒルトに対して、ジークフリートは「これは恐ろしいほど厄介な秘密なので、聞かないでおくれ」（1475-7）と言うものの、夫の唯一の急所に関する秘密さえ知っているクリームヒルトは、しきりに子細を聞き知ろうとする。そのようなところへブルンヒルトがグンター王とともに姿を現したので、ジークフリートはあわてふためく。その夫の狼狽ぶりを見て、クリームヒルトはブルンヒルトとその帯との関係を察して、それを彼女に見せようとするので、ついにジークフリートは「帯を隠してくれるならば事情を打ち明ける」（1493）と約束して、妻とともに行列に従ってその場を立ち去って行くのである。

二人に代わってグンター王とともにその場に姿を現したブルンヒルトは、前

日に比べるとだいぶ機嫌も直り、夫に対して従順になっている。夫に向かってブルンヒルト自らが「自分は驚くほど人間が変わってしまった」(1504) と言っているほどである。イーゼンラントからヴォルムスへ向かう船の中でグンター王に激しく抵抗したことに関しても、次のように素直に詫びるのである。

・・・Vergib mir! Großmut war's,
Was ich für Ohnmacht hielt. Du wolltest mich
Nur nicht beschämen, als ich auf dem Schiff
So unhold trotzte! ・・・ (1518-21)

・・・許してください！私は無力だと思っていたのに、
それは寛大な心だったのですね。私が船の上で
あんなに激しく抵抗したとき、あなたは私に
恥をかかせたくなかったのですね！・・・

ブルンヒルトはこのように「穏やか」(milde, 1525) になったのであるが、しかし、ジークフリートに対しては依然として憎しみを抱いている。彼女がグンター王に語る言葉によれば、「国王たる者が道案内をしたり、使者の役目を引き受けたりすることが不思議でならない」(1528-31) のであり、そのような男に彼女がイーゼンラントでまず最初に挨拶したことがなんとも口惜しいのである。否、それどころか、ブルンヒルトはしまいには彼を殺すようにと要求する。『ニーベルンゲンの歌』ではジーフリトの暗殺を要求するのはハゲネであって、プリュンヒルトはその暗殺の口実を作るだけであるのに対して、ヘッベルの戯曲では両王妃口論の前にすでにブルンヒルト自らがジークフリートの殺害を要求しているのである。それに対してグンター王が「彼は私の妹婿であり、彼の血は私の血でもある」(1548-9) と言えば、ブルンヒルトは「では、彼と一騎打ちの勝負をして、彼を埃の中に投げ飛ばしてください」(1550-1) と要求する。「この国にはそんな習慣はない」(1554) と答えるグンター王に向かって、ブルンヒルトは次のように主張するのである。

・・・Ich laß nicht ab,
Ich muß es einmal sehn. Du hast den Kern,
Das Wesen, er den Schein und die Gestalt!
Zerblase diesen Zauber, der die Blicke

Der Toren an ihn fesselt. ・・・ (1554-8)
・・・
・・・Ob er den Lindwurm schlug
Und Alberich bezwang: das alles reicht
Noch nicht von fern an dich. In dir und mir
Hat Mann und Weib für alle Ewigkeit
Den letzten Kampf ums Vorrecht ausgekämpft.
Du bist der Sieger, und ich fordre nichts,
Als daß du dich nun selbst mit all den Ehren,
Wornach ich geizte, schmücken sollst. Du bist
Der Stärkste auf der Welt, drum peitsche ihn
Zu meiner Lust aus seiner goldnen Wolke
Heraus, damit er nackt und bloß erscheint,
Dann leb er hundert Jahre oder mehr. (1563-74)

・・・私はやめません。
一度それを見なくては。あなたは芯の強い方で、
中身のある方なのに、彼は見かけだけで、形だけです！
愚かな人たちの視線を彼に縛り付けている
魔力を暴いてください。・・・
・・・
・・・彼が竜を打ち殺し、
アルベリヒを征服したにせよ、それらすべてでも
まだあなたには遠く及びません。あなたと私は
男として女として未来永劫のために
優先権をめぐって最後の戦いを戦い抜いたのです。
あなたは勝利者ですので、私があこがれてきた
すべての名誉でもってあなたが自らを飾るということ
以外には、私は何も要求しません。あなたは
この世で最強の者です。だから彼が丸裸になるよう、
その黄金の雲の中から彼を叩き出して私を喜ばせてください。
そのあとは彼は百年でもそれ以上でも生きればよいのです。

こう言ってブルンヒルトはグンター王とともにその場を立ち去るのであるが、

この見せかけと実体がのちに逆転することによってジークフリート暗殺の悲劇はさらに先へと展開していくのである。

その見せかけと実体の逆転は、その後クリームヒルトとブルンヒルトが礼拝堂へ向かう途中で互いに夫の自慢話をしたことから少しずつ動き始める。まずクリームヒルトが夫ジークフリートをほめ称えて、

Mein edler Gatte ist nur viel zu mild,
Um den Verwaltern seiner Königreiche
So weh zu tun, sonst hätt' er seinen Degen
Schon längst zu einem Zepter umgeschmiedet
Und über die ganze Erde ausgestreckt.
Denn alle Lande sind ihm untertan,
Und sollte eins es leugnen, bät ich mir's
Sogleich von ihm zum Blumengarten aus. (1609-16)

私の夫はとても温和な人ですから、
自分の王国の支配者たちを悲しめることは
できないのです。そうでなければ夫はすでに
剣でもって王位を掌握して、
世界中を支配しているところです。
というのも、すべての国は夫に服従しているのですから。
誰かがそれを否定でもしたら、私はただちに
その者の国を私の花園にしてもらいます。

と言えば、ブルンヒルトはブルンヒルトで自らの夫グンターの優位を主張しながら、イーゼンラントでの出来事を引き合いに出して、次のように反論する。

Er trat bei mir zurück vor deinem Bruder,
Wie ein Vasall vor seinem Herrn, und wehrte
Dem Gruß, den ich ihm bot. Das fand ich auch
Natürlich, als ich ihn—er nannte sich
Ja selber so—für einen Dienstmann hielt. (1666-70)
・・・
Ich sah den Wolf wohl so vor einem Bären

Beiseite schleichen, oder auch den Bären
Vor einem Auerstier. Er ist Vasall,
Wenn er auch nicht geschworen hat. (1672-5)

私のところに来たとき、彼は家臣が主君にそうするように、
あなたの兄上の前から後ろへ退いて、私が
送った挨拶を退けたのです。私は彼を――彼が自ら
そう呼んだように――家来だと見なしましたので、
それも当然のことだと思いました。
・・・
狼は熊の前では脇へ退く、
あるいは熊は野牛の前では脇へ退くものと
私は心得ました。彼はたとえ誓わなかったとしても、
家臣には違いないのです。

このような言葉に気分を害されたクリームヒルトとブルンヒルトの間はますます険悪になっていき、ついにクリームヒルトは、『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように、ブルンヒルトを「わが夫の側女(そばめ)」(das Kebsweib meines Gatten, 1690) と罵ってしまい、さらにその証拠として帯を見せてしまう。「それは私のもので、他人の手に渡ったところを見ると、夜の間に盗まれたに違いない」(1692-4) とブルンヒルトが反抗すれば、クリームヒルトは「そなたに勝った男、つまり、私の兄上ではなく」(1696-7)、「私の夫が私にくれたものです」(1699) と言って、秘密を暴露してから、ブルンヒルトに先んじて侍女たちを引き連れて礼拝堂へ入って行くのである。

ブルンヒルトはこうして自らが欺かれていたことを知り、このうえない恥辱を受けて、乳母の胸に泣きすがる。このブルンヒルトの恥辱を利用してジークフリート暗殺を主張したのが、『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、ハーゲンである。王弟ギーゼルヘアはそれを諫めるが、それに対してハーゲンはこう言う。

Wollt ihr Bastarde ziehn an eurem Hof?
Ich zweifle, ob die trotzigen Burgunden
Sie krönen werden ! Doch du bist der Herr ! (1765-8)

そなたたちはこの宮廷で私生児を育てるつもりですか？
誇り高いブルグント族が私生児に王冠を譲っては
なりません！そなたが主君なのですから！

グンター王は黙ったままなので、ハーゲンは『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように、すべてを自分に任せるように言いくるめて、ジークフリート暗殺を企み始めるのである。

Ⅳ．ハーゲンの策略――第四幕――

その暗殺を実行するためにハーゲンがクリームヒルトからジークフリートの秘密を聞き出すのが第四幕である。『ニーベルンゲンの歌』と同じ展開であり、ハーゲンはまず策略の手始めとして、デンマーク王とザクセン王がまたもや攻め寄せようとしているという虚報をジークフリートに伝える。ジークフリートは帰国の準備に取りかかっていたが、帰国をひとまず見合わせて、再度戦闘での加勢を約束する。するとハーゲンは次の策略として、ジークフリートがクリムヒルトに出陣の旨を話し終えるのを見計らって、クリームヒルトのもとに出かけて、夫の身の上を案じる彼女の心を巧みにとらえる。弓の矢はほんの指先ほどの隙間さえあれば突き刺さって、それが命取りとなることをクリームヒルトが心配すれば、ハーゲンは次のように彼女を慰める。

Was geht das deinen Siegfried an?
Er ist ja fest. Und wenn es Pfeile gäbe,
Die sichrer, wie die Sonnenstrahlen, träfen,
Er schüttelte sie ab, wie wir den Schnee！ (1995-8)

それがそなたのジークフリートには何の関係があろうか？
彼は実に丈夫じゃ。太陽の光よりも確実に当たる
弓の矢があったとしても、彼ならそれらを、
雪を振るい落としでもするように、払い除けることだろう！

このように慰めてくれるハーゲンに対して彼女が、「でも夫には一つの急所があると歌謡に歌われていることを、あなたは忘れたのですか、それとも知らないのですか」(2008-10) と尋ねると、ハーゲンはすっかり忘れていたふりをして、巧みに彼女にそのことを語らせるよう仕向けるのである。

Ein rascher Windstoß warf's auf ihn herab,
Als er sich salbte mit dem Blut des Drachen,
Und wo es sitzenblieb, da ist er schwach.　(2018-20)

夫が竜の血を浴びていると、突風が吹いて
菩提樹の葉が夫の身の上に落ちてきたのです。
その葉の落ちてきた箇所が、夫の弱点なのです。

誰もその箇所を知らないのだから、何を恐れる必要があるかと尋ねるハーゲンに向かって、クリームヒルトは自らの心配を打ち明けて言うには、

Ich fürchte die Valkyrien ! Man sagt,
Daß sie sich stets die besten Helden wählen,
Und zielen die, so trifft ein blinder Schütz.　(2027-9)

私はヴァルキューレたちを恐れているのです！
彼女たちはいつも最強の勇士たちを選びますし、狙われた者は
目をつぶって放たれた矢でも当たると言われていますから。

『ニーベルンゲンの歌』では記述されていない北欧神話のヴァルキューレをこの場面で引用しているところにヘッベルの特徴があると言えよう。ヴァルキューレたちの恐怖から逃れるためには、ジークフリートの急所を確実に護ってくれる勇士が必要である。自分こそがその勇士になってあげようと、ハーゲンはクリームヒルトをうまく騙(だま)して、ジークフリートの両肩の間に急所があることを聞き出すことに成功するのである。狡猾なハーゲンの策略はなお続き、「ひとたび見張り人となったからには失敗は許されない」(2073-4) と言って、ジークフリートの衣装の上に小さな十字の印を縫い付けておいてくれるように頼めば、クリームヒルトもハーゲンを信じてそれを承諾するのである。

こうしてジークフリートの弱点の秘密を聞き出したハーゲンは、『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように、次の策略として敵が和睦を申し出てきたという虚報 (2183-4) をジークフリートに伝えるとともに、狩りに出かけることを提案する(2199)。ギーゼルヘアとゲーレノートは断わるが、敵の侵攻の沙汰止みに憤りを覚えたジークフリートは憂さ晴らしに狩りに出かけることを了承する(2206-8)。これを知ったクリームヒルトは、夫に家にとどまるよう説得

し（2210）、出かけるならせめて衣服を着替えるよう勧める（2222-3）が、夫はそれらの警告を聞き流す。山々が崩れ落ちてきた夢を見た(2233)と言って、しきりに夫を引き止めようとしても、ジークフリートはただ妻を宥めながら笑って取り合わずに、ハーゲンとともに狩りに出かけて行くのである。一人あとに残されたクリームヒルトは、夫に打ち明けられなかったことをただ後悔する（2271）のみである。

V．ジークフリートの暗殺――第五幕――

こうして最後の第五幕において展開されるのはジークフリートの暗殺である。ハーゲンはオーデンの森の中で泉の水がさらさらと流れる場所を見つけると、そこで休憩しようと提案し、従者たちに食事の準備を命じる。角笛の合図でジークフリートも獲物を携えてその場に集まって来る。ジークフリートはまず一杯の冷たいワインを所望すると、ハーゲンは飲み物を忘れてきた（2373）と言う。狩りはどこで催されるか分からなかったので、シュペッサルトの方へ送り届けた（2387-8）というのである。『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じ展開であるが、暗殺前後の状況については多少の改作が施されている。すなわち、ジークフリートは「せめて水でもないのか」（2390）と不平を述べるが、ハーゲンから勧められるままに耳を澄ませると、泉の水が湧き出る音が聞こえてくる。ジークフリートは喜び勇んで泉の方に駆け寄ろうとするが、「クリームヒルトの一件では済まないことをした」（2404）ので、その償いとして最後に飲むことを申し出る。そこで最初に泉の水を飲むこととなったのがハーゲンである。ハーゲンは泉に近づいて水を飲もうとするが、「屈まねばうまく飲めない」（2409）と言って、一度引き返し、武具を置いてから再度泉に近づく。ハーゲンが氷のように冷たい水を飲んだあと、他の者たちはまず食事をしたいと言い出したので、二番目にはジークフリートが喉の渇きをいやすこととなった。ハーゲンと同じように、ジークフリートも武具を置いて泉に近づき、冷たい水を飲もうとして、身を屈める。その瞬間、ハーゲンがたちまちはずみをつけて自らの槍をジークフリートの背中めがけて投げつけるのである。ジークフリートは叫び声を上げて、卑怯な暗殺行為を罵りながら、せめて剣を返して勇士らしく勝負をするようにと願い出るが、ハーゲンはもちろんそれに応じない。ジークフリートは地面に打ち倒れて、なおも続けて言う。

・・・Den Siegfried seid ihr los!
Doch wißt, ihr habt in ihm euch selbst erschlagen,

Wer wird euch weiter traun ! Man wird euch hetzen,
Wie ich den Dänen wollte－　(2444-7)

・・・このジークフリートをよくも片づけやがったな！
だが、お前たちはお前たち自身をも殺したということを知るがいい。
もはや誰がお前たちを信用しようか！私がデンマーク勢を
倒すがごとく、お前たちも倒されることになるのだ――

ジークフリートは、しかし、デンマーク勢との戦いが策略であったことをハーゲンから聞かされると、不実なブルグント族を呪いながら、最後に妻クリームヒルトの行く末を案じて、こう叫ぶ。

Mein Weib ! Mein armes, ahnungsvolles Weib,
Wie wirst du's tragen ! Wenn der König Gunther
Noch irgend Lieb und Treu zu üben denkt,
So üb er sie an dir ! －Doch besser gehst du
Zu meinem Vater ! －Hörst du mich, Kriemhild ?　(2459-63)

わが妻よ！あわれにも、不安に悩まされるわが妻よ、
そなたはこれをどのように耐えるのか！グンター王が
なんらかの愛と誠を尽くしてくれるつもりなら、
彼がそなたにそれを見せてほしい！――否、そなたはわが父のもと
に行くがいい！――クリームヒルトよ、聞こえているか？

このようにクリームヒルトの身を案じながら、ジークフリートはついに息を引き取るのである。ハーゲンは山中で追剥ぎがジークフリートを殺害したということにして、その亡骸をクリームヒルトのもとに運ぶよう命じる。多少の相違はあれ、大筋においては素材の『ニーベルンゲンの歌』の展開とほぼ同じことが容易に理解されよう。

一方、クリームヒルトについても多少の改作はあれ、ほぼ『ニーベルンゲンの歌』と同じである。夫が狩りに出かけて、ただならぬ予感に怯える彼女は、まだ夜が明けぬうちから起き上がって、早く礼拝堂へ出かけて祈りを捧げたい気持ちである。母ウーテも同様に今朝はなんとなく騒々しい気がして寝てはいられない。二人が不安を抱きながら話しているところへ、下僕が入って来て、

戸口の前に死骸が置かれていることを報告する。それを聞いたクリームヒルトは、『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように、ただちにそれがジークフリートであることを察し、しかもブルンヒルトの指図によって、伯父ハーゲンのなした業である（2518）ことを悟る。彼女はしばらくジークフリートの死骸にすがりついて悲嘆に暮れていたが、やがてグンター王らがその場に姿を現すと、彼女は兄グンターに向かってこう言う。

・・・Es waren also Schächer?
So stell dich dort mit allen deinen Sippen
Zur Totenprobe ein. (2597-9)

・・・追剥ぎの仕業だったのですね？
それではあなたの一族すべてとともに
死骸の裁きへ行っていただきましょう。

こうしてクリームヒルトは夫の亡骸を棺台に乗せて礼拝堂へ運び込ませると、司祭に「事実と正義を求めてやって来た」（2612）ことを告げる。この司祭は『ニーベルンゲンの歌』ではドーナウ河渡河の場面（第25歌章）にしか登場しないが、ヘッベルの戯曲ではすでに第二部第四幕及び第五幕に登場して重要な役割を果たしており、この場面でも司祭はクリームヒルトの心のうちに復讐の意志を読み取ると、彼女を教え諭して次のように言うのである。

Du suchst die Rache, doch die Rache hat
Der Herr sich vorbehalten, er allein
Schaut ins Verborgne, er allein vergilt！ (2613-5)

あなたは復讐を求めておられる。しかし、復讐は
神様がなされるもので、隠れたものを見て、
報復することができるのは神様だけです。

このあと司祭は全世界の罪をわが身一人に引き受けた神の愛と慈悲を説いて聞かせるものの、クリームヒルトは司祭が語り終えるや否や、死骸の裁きを敢えて行うのである。ハーゲンはその死骸の裁きを侮っていたが、いざジークフリートの死骸に近づくと、その傷口からは新たに血が流れ出した。これによって暗

殺はハーゲンの仕業であることが判明したのである。暗殺を咎められたハーゲンは「懲戒を加えたのだ」(2685) と言って反抗するだけではなく、さらにはジークフリートの腰に差していたバルムンクの剣を取り上げて、自分のものとして悠々と一族の集まっている方へ引き上げて行く。司祭の登場を除けば、素材の『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じ展開であり、こうしてハーゲンに夫の遺品を奪い取られたクリームヒルトは、悲しみをさらに深くして夫の亡骸の上に崩折れてしまい、第二部の最終幕が下りるのである。

第三部　クリームヒルトの復讐

Ⅰ．クリームヒルトの再婚――第一幕――

第三部は第二部と同様に五幕から成り、クリームヒルトの復讐を取り扱っている。第二部と第三部との間にはどのくらいの歳月が経過しているかについては、はっきりとした記述は見られないが、クリームヒルトはジークフリートとの間に生まれた息子を祖父のもとに預けたことになっている(vgl. 3017-9) ことを考慮に入れると、ある程度の歳月が経過しているものと考えてよいであろう。第三部のあらすじの展開は『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じと言ってもよいが、もちろん戯曲化に伴い、削除された場面も当然多くあり、第一幕はいきなりベッヒェラーレンの辺境伯リューデゲールが使者としてブルグント国に到着した場面から始まっている。リューデゲールは、すなわち、『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、王妃ヘルケを亡くしたフン族のエッツェル王がクリームヒルトに求婚している旨を伝えるためにヴォルムスへやって来たのである。グンター王からクリームヒルトが寡婦の身であることを聞かされると、リューデゲールはすでにそれを承知の上で次のように答える。

Wie Etzel Witwer, ja ! Und eben dies
Verbürgt dem Bund der beiden Heil und Segen
Und gibt ihm Weihe, Adel und Bestand.
Sie suchen nicht, wie ungeprüfte Jugend
Im ersten Rausch, ein unbegrenztes Glück,
Sie suchen nur noch Trost, und wenn Kriemhild
Den neuen Gatten auch mit Tränen küßt,
Und ihn ein Schauder faßt in ihren Armen,
So denkt sich jedes still : Das gilt dem Toten !

Und hält das andre doppelt wert darum. (2739-48)

エッツェル王とて同様に男やもめ！だからこそ
二人の結婚には至福と祝福が保証され、
神聖さと品位、そして永続性がもたらされるのです。
お二人が求めるのは、未経験な若者が
最初から有頂天になって無限の幸せを求めるのと異なって、
慰めというものだけです。たとえクリームヒルト様が
新しい夫に涙ながらに接吻しようとも、
また新しい夫が彼女を腕に抱いて身震いしようとも、
それは亡き人へ向けられたものだと、ご両人が静かに思えば、
そのためにかえって価値も二倍に増すというものです。

ヘッベルらしい人生論風な表現となっており、グンター王もまったく同意を示すが、しかし彼はクリームヒルトがジークフリートを失った日から今日に至るまで自分たちのところへは姿を見せずに、ロルシュ修道院の亡き夫の墓へ詣でる毎日であることを伝える。するとリューデゲールは、自らが直接クリームヒルトに会って、エッツェル王の望みを彼女に伝えることにしてその場を退くのである。

このクリームヒルトの再婚に猛反対をしたのが、『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、ハーゲンである。彼の意見は、クリームヒルトをフン族へ行かせるくらいなら、彼女を鎖で縛りつけておいた方がよい（2769-70）というのである。ジークフリート暗殺以来、彼女はハーゲンに握手をしないどころか、グンター王に対しても接吻の挨拶さえしたことがない（2775−7）ことをハーゲンは指摘する。これに対してグンター王はハーゲンの助言こそ呪わしく、当時自分がもっと大人であったら、あのように目をくらまされることはなかったろう（2789-91）と後悔する。グンター王はハーゲンの助言に従ったがゆえに、ブルンヒルトは飲んだり食べたりしていても、またルーネ文字に読み耽っていても死骸も同然である（2815-6）ことを訴える。そしてこの一族の恥辱を拭い落としてくれるのがエッツェル王との縁組である(2841-2)と考えて、グンター王はこの求婚に積極的な姿勢を見せるのである。クリームヒルトが恨みを晴らさずにはいない（2854-5）とハーゲンに指摘されても、グンター王は「我々は仲直りをしたのだ」（2861）と答える。これに対してハーゲンは、クリームヒルトが仲直りのふりを見せたのも弟君ギーゼルヘアが毎日のように頼み、母君

ウーテが泣いてすがりついたからだ（2873）と言って、かえって「その仲直りは新たな費用の項目として加わり、借金はいっそう大きくなったのだ」（2876-7）と言い張る。そしてジークフリートの所有していた黄金をクリームヒルトから取り上げたのも、「それでもって彼女が軍勢を募ることは訳のないことであった」（2912-3）からだとハーゲンは主張する。このようなハーゲンの主張に対して母后ウーテは、接吻による神聖な約束を汚すようなクリームヒルトではない（2881-2）ことはもちろんのこと、クリームヒルトが黄金をばらまいたのも「ジークフリートの供養のため」（2919-20）だと言って、娘には復讐する意志など少しもないことを信じ込んでいる。結局のところ、グンター王もハーゲンの警告を退けて、まずは母后ウーテにクリームヒルトのもとに出かけて行って、この縁談の話を切り出すよう依頼するのである。

こうして母后ウーテは娘クリームヒルトを訪れるが、なかなか話を切り出すことができない。そのうちギーゼルヘアとゲーレノートが加わって、やっとのことでエッツェル王の求婚を伝え、三人一緒になってクリームヒルトを説得しようとするが、彼女はそれを断固として拒否する。それどころか続いてそこにやって来たグンター王に向かっては、「命のある限り、トロニエのハーゲンを訴えます」（3172-3）と言い張るばかりである。

このようにクリームヒルトは断固拒否していたが、しかし、そのあと使者リューデゲールに面会すると、一転して再婚の承諾を与える。そのきっかけとなったのは、――この点で素材の『ニーベルンゲンの歌』とは若干異なるのであるが――ハーゲンがこの再婚に反対していることを先にゲーレノートとギーゼルヘアから聞いていたからである。使者に出会う前に、彼女は次のように独り言を口にしている。

Und Hagen Tronje, hör ich, fürchtet mich ! –
Du könntest Grund erhalten ! Mag die Welt
Mich anfangs schmähn, sie soll mich wieder loben,
Wenn sie das Ende dieser Dinge sieht !　　(3231-4)

そしてハーゲン・トロニエは、聞けば、私を恐れているようだ！
恐れる理由を分からせてやろう！世間は最初のうちは
私を罵るかも知れないが、この事の成り行きを見れば、
再び私をほめ称えることであろう！

ここですでにクリームヒルトはエッツェル王の力を借りてハーゲンに仕返しをすることを決意していると言ってもよいであろう。使者リューデゲールに面会し、地上で国境というものを持たないような王国（3265-6）を提供されても、彼女はそれ以上のものを要求して、次のように尋ねる。

Herr Etzel wird mir keinen Dienst versagen? (3273)
エッツェル殿は私にどんな奉仕をも拒みはしないでしょうね？

エッツェル王の奉仕のみならず、リューデゲールにも奉仕を要求すると、彼は答えて言う。

・・・Was ich vermag,
Ist dein bis auf den letzten Odemzug. (3274-5)

・・・私にできることなら、
この息の続く限り、あなたのためにしてあげます。

誓いを催促すると、リューデゲールはしかと誓った（3276）ので、クリームヒルトはついに決意し、さっそく母后と兄弟を呼び寄せて、皆の前でエッツェル王の妃になることを表明する。クリームヒルトはさらにグンター王たちにフン族の国まで一緒に随行してくれるかと尋ねるが、グンター王はライン地方を去るわけにはいかないので、ひとまずリューデゲールにすべてを委ねて、いずれ自らが訪問することを約束する。結局のところ、クリームヒルトは忠義者の老僕エッケヴァルトだけを連れてフン族の国へと旅立つことになるのである。

Ⅱ．ブルグント族の旅――第二幕――

第二幕冒頭の舞台はクリームヒルトがエッツェル王に嫁いでから７年後のドーナウ河畔である。楽人ヴェルベルとスヴェムメルを使者としてフン族の王妃クリームヒルトから饗宴に招待されたブルグント族は、今やドーナウ河に達し、渡河を終えようとしているところである。この渡河の場面に関してもヘッベルは大筋において素材の『ニーベルンゲンの歌』の展開を踏襲している。ただこのブルグント族の旅には先の二人の楽人も同行しているが、使者としての役目を果たした二人はこのドーナウ河を渡り終えたところで、先を急ぐからと言って、グンター王に暇乞いを告げて一足先にフン国に向かうことになってい

る。そうしているうちにハーゲンは船で最後の荷物を運び終えるが、荷揚げが済むや否や、彼は再び船の中へ躍り込み、司祭めがけて飛びかかって、司祭を水中に突き落としてしまう。『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じ展開であり、司祭は片腕が不自由であったにもかかわらず魚のように上手に泳ぐことができ、無事に向こう岸に辿り着いて、別れを告げて国元へ帰って行った。するとハーゲンは剣を引き抜いて、船を粉々に打ち砕いてしまった。これに驚いたグンター王がわけを尋ねると、ハーゲンは渡船を探しているうちに水の乙女たちに出会い、一度目は彼女たちからよい予言を聞いたものの、二度目には次のような不吉な予言を聞いたからだと答える。

Höhnten sie mich : Wir haben dich betrogen,
Ihr alle seht, wenn ihr ins Heunenland
Hinunter zieht, den grünen Rhein nicht wieder,
Und nur der Mann, den du am allermeisten
Verachtest, kommt zurück.　(3422-5)

彼女たちはわしを罵って言ったのだ。「先程は嘘をついたのです。
あなた方は皆、フン国へ下って行かれるなら、
二度と緑のライン河畔へは戻れないことをご承知おきください。
あなたが最も嫌っている男の人だけが
戻ることになっているのです」と。

ハーゲンが最も嫌っている男とはもちろん司祭のことである。ハーゲンはこのような予言に対して「帰国するのを忘れるくらいに異国の地が我々には気に入ることであろう」(3427-8) と皮肉をこめて答えたものの、ハーゲンはやはりよからぬ結果になると思っていたのである。ハーゲンはさらに自分の額に赤い血がついているのを見咎められて、渡し守をも殺害していたことを打ち明ける。このバイエルンの豪傑ゲルフラートは大きな櫂を振り回して飛びかかってきたので、ハーゲンは自らの剣で仕返しをして、彼の船と同様に粉々に打ち砕いてやったのだと言う。グンター王はこれを聞くと、早くこの地から立ち去る必要があることを口にするが、ハーゲンは「いずれにせよ、我々は死の網に絡みついている」(3460) ことを一同に悟らせる。フォルケールがこのハーゲンの言葉に賛同すれば、ハーゲンは彼をほめ称えて言う。

Das ist ein Wort, mein Volker, habe Dank.
Jawohl, wir waren's stets, es ist nicht neu,
Und einen Vorteil haben wir voraus
Vor all den andern, welche sterben müssen :
Wir kennen unsern Feind und sehn das Netz－ (3461-6)

よく申した、フォルケールよ、ありがたい。
その通りだ、最初からそうだった、今に始まったことではない。
それに我々には、死んでいかねばならない
ほかのすべての人たちにもまして一つの利点がある。
我々は敵を知っており、罠を見抜いているということだ――

言葉こそ違え、ハーゲンが死を覚悟した言葉によって一行の者たちを奮い立たせているという点では、『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じである。こうしてブルグント族は覚悟を決めてフン国への旅を続けるのである。

ブルグント族が次に滞在するのは、『ニーベルンゲンの歌』と同様、辺境伯リューデゲールの居城ベヒラルンである。ただヘッベルの戯曲が『ニーベルンゲンの歌』と異なるのは、このベヒラルンの地にディートリヒがヒルデブラントとともにすでに現れていることである[10]。彼の役割はもちろんブルグント族にクリームヒルトの企みを警戒するように忠告することである。ディートリヒがリューデゲールに導かれてゲテリンデ夫人とその娘グートルーンから歓迎の挨拶を受けているうちに、ブルグント族が到着する。このリューデゲールの居城においても際立って注目を浴びるのは、ハーゲン、すなわち、娘グートルーンが形容している言葉を用いれば、「死人のように窪んだ目をしている青ざめた男」(3593) のハーゲンである。ハーゲンは一同に挨拶を済ませると、一つの珍しい楯に興味を示す。その楯を壁より取り外して手にしてみると、ずしりと重い。それはリューデゲール夫人ゲテリンデの父ヌードゥングの遺品であった。それを知ったハーゲンは「彼の死がまことに残念でならぬ。生きていたらわし自身が、失礼だが、彼を殺害していたかも知れぬ。強情な英雄であったに

10) ヘッベルの戯曲ではこの二人のほかにイーリンクとチューリンクがエッツェル王の使者としてこの地を訪れている。前者の二人は自ら進んでこの地にやって来たのに対して、後者の二人はエッツェル王の命令によって客人たちを出迎えに来たものである。

違いない」(3645-7)と言いながら、その楯を再び壁に掛けようとすると、リューデゲール夫妻はそれをハーゲンに贈ることにした。それを聞いたハーゲンは「勇敢なジークフリートがわしに遺したバルムンクの剣にこの楯はぴったりであろう」(3650-1) と答える。ハーゲンが口にする一言一言が反抗精神に満ちた英雄の言葉であることが容易に理解できよう。

このリューデゲールの居城でのもう一つの重要な出来事は、『ニーベルンゲンの歌』と同じように、ブルグント族の王弟ギーゼルヘアとリューデゲールの娘グートルーンとの婚約である。『ニーベルンゲンの歌』ではこの婚約を勧めるのはハーゲンであるが、ヘッベルの戯曲ではフォルケールがその役目を果たしている。フォルケールは娘グートルーンを初めて目にしたときあわてふためいた男をゲーレノートだと思い込んでいたが、――否、そう思い込むふりをしてギーゼルヘアの心を掻き立てたのだと読み取ることもできよう――それがギーゼルヘアだと分かると、さっそくギーゼルヘアとグートルーンを結びつけようとする。フォルケールの意図は、そのあとの独り言 (3693-4) からも分かるように、ブルグントの王弟とリューデゲールの娘グートルーンを結びつけることによって、エッツェル王の忠実な家臣リューデゲールを味方にしておくことであるから、王弟はゲーレノートでもギーゼルヘアのどちらであってもよかったのである。幸い、ギーゼルヘアが積極的な姿勢を示して、自分自身でリュエデゲールに娘との結婚を願い出たので、すべてが順調に進んだ。しかもそれにハーゲンとグンター王が口添えをし、娘の気持ちを汲み取ったリューデゲールも承諾したので、婚約はたちまちのうちに成立し、婚礼はフン族の国から戻って来てから挙げることとなった。このように婚約が整ったところへ突如としてディートリヒが歩み寄り、「クリームヒルト王妃はいまだに昼夜泣き通している」(3758) と知らせて、王妃の企みを警戒するように忠告する。これを知ったグンター王はハーゲンに「お前一人がその気になれば、我々は助かるのだ」(3778) と言って、一人で国元に帰るよう依頼する。しかし、それを受け入れるハーゲンではないことは、最初から明らかである。グンター王自らも実はハーゲンと同じ意地に駆られてフン族の国へ出かけているのであり、ハーゲンが断固として帰国を拒否すると、グンター王はハーゲンの肩を叩きながら覚悟を決めてフン族の国への旅を続けることを一同に知らせるのである。

Ⅲ. クリームヒルトの出迎え――第三幕――

フン族エッツェル王の居城では使者ヴェルベルとスヴェムメルが一足先に到着して、王妃クリームヒルトにブルグント族がこちらに向かっていることを報

告する。それによれば、先頭に立って道案内しているのはハーゲンである。クリームヒルトは一行が到着したら即座に策略を弄して武器を取り上げるよう指示するとともに、ニーベルンゲンの財宝を報酬としてヴェルベルとスヴェムメルにハーゲン殺害をけしかける。彼女はさらに使者たちにブルンヒルト王妃の消息を尋ねる。ヴェルベルが報告するところによると、ブルンヒルト王妃は死んでいるわけでもないのにジークフリートの墓所に入って（3815）、柩のそばにしゃがみ込んでいる（3820）という。そして目には涙をいっぱいに溜め、あるときには爪で顔を、またあるときは柩の板をかきむしったりしており、グンター王がその入口を塞ぐように命令したときには、乳母フリッガが急いで戸口に立ち塞がった（3824-6）という。最後に、クリームヒルトは母ウーテの消息を尋ねる。母ウーテは言伝として雪のように真っ白な髪の毛（3831）を使者たちに預けていたのである。そのような言伝を寄こした事情をヴェルベルが説明して語るところによると、一族が出立する前夜に母后ウーテはすべての鳥が空から落ちて死に絶えた夢を見た（3835-7）からだという。そしてそれらの鳥は子供たちが、秋に枯葉をかき集めるように、足でかき集めて、地に埋めたという。クリームヒルトはその母の言伝が「兄弟たちを長く引き止めてはならぬ」（3829-30）という意味であることを悟りはするものの、自らにとっては吉兆だと思って、ただちにヴェルベルとスヴェムメルに向かって出迎えの準備に取りかかるよう命ずるのである。

二人の使者が立ち去ると、次にはエッツェル王が従者とともにクリームヒルトの前に現れる。エッツェル王は王妃の身内をどのように出迎えたらよいか、遠慮なく望むところを申し出るように言う。エッツェル王はクリームヒルトと再婚して七年になるが、その間に王妃が世継ぎとして息子を産んでくれたので、王妃の望むことは何でも適えてやろうというのである。そこでクリームヒルトはすべてのことを自分に任せてほしいと望んで、次のように言う。

Vergönne denn, daß ich sie nach Verdienst
Und Würdigkeit empfange und behandle,
Ich weiß am besten, was sich für sie schickt,
Und sei gewiß, daß jeder das erhält,
Was ihm gebührt, wie seltsam ich das Fest
Auch richten und die Stühle setzen mag. (3888-93)

では、私が功績と品位に従って

彼らを出迎え、もてなすことをお許しください。
彼らには何がふさわしいかは私が最もよく知っていますから。
そして、たとえ私がいかに奇妙な饗宴を催し、
椅子の並べ方も奇妙だとしても、それが各人には
ふさわしいのだということを確信してください。

このたびの一族招待はもっぱらクリームヒルトの願いによるものだから、エッツェル王も王妃の好きなようにするがよいと言って、一族歓迎に関するすべてのことをクリームヒルトに委ねるのである。ただエッツェル王の唯一の願いとしては、七年前からこのフン国に客人として滞在しているディートリヒだけには敬意を表してほしいと言い渡す。クリームヒルトもそれを承諾したところへ、ブルグント族がまもなく到着する旨の報告がもたらされる。クリームヒルトはさっそく自らが一族を出迎えて部屋に案内するので、エッツェル王はここで待っていてほしいと言い残して、一族を出迎えに行くのである。

今やニーベルンゲン一族とも呼ばれるブルグント族は、ディートリヒとリューデゲールの案内によって城の前庭に到着する。そこへクリームヒルト王妃が多くの従者を伴って一族を出迎えるが、その言葉は最初から皮肉に満ちている。

Seid ihr es wirklich? Sind das meine Brüder?
Wir glaubten schon, es käm ein Feind gezogen,
So groß ist euer Troß. Doch seid gegrüßt！ (4008-10)

本当にあなた方ですか？私の兄弟ですか？
私たちはてっきり敵が押し寄せたものと思っておりました。
とても大勢なものですから。でもようこそおいでくださいました！

クリームヒルトは弟ギーゼルヘアには接吻の挨拶をし、案内役のディートリヒには礼を述べて手を差し出したが、そのほかの者には誰にも接吻せずに、また抱擁もしなかったので、ハーゲンは主君と家来への挨拶の仕方が異なると言って、兜の緒をさらにしっかりと結びつけた。「そなたも来たのか？誰がそなたを招待したのか？」(4020) というクリームヒルトの問いに対して、ハーゲンも負けずに答えて言う。

Wer meine Herren lud, der lud auch mich!
Und wem ich nicht willkommen bin, der hätte
Auch die Burgunden nicht entbieten sollen,
Denn ich gehör zu ihnen, wie ihr Schwert. (4021-4)

わしの主君を招いた者は、わしをも招いたことになるのじゃ！
わしを歓迎せぬ者は、ブルグント一族をも
呼び寄せるべきではなかったのじゃ。
わしは、剣と同様に、彼らの一員なのだから。

最初の出迎えの場面からすでに二人は激しく対立していることが明らかである。「ニーベルンゲンの宝はどこにある？あの宝を運ぶにはこれほど多くの軍勢が必要であったろう。さあ、渡してもらおう」(4034-6) と言って、クリームヒルトが財宝を要求すれば、ハーゲンは次のように答える。

Was fällt dir ein? Der Hort ist wohl bewahrt,
Wir wählten einen sichren Ort für ihn,
Den einzigen, wo's keine Diebe gibt,
Er liegt im Rhein, wo er am tiefsten ist. (4037-40)

なんということを思いつかれる？宝は大切に保管されてある。
我々は宝にとって安全な場所を選んである。
泥棒もいない唯一の場所じゃ。
宝はライン河の最も深いところに沈んでいるのじゃ。

「そなたは、今度の旅には自分が必要だと言っていたが、財宝は必要でなかったのか」(4043-4) と尋ねるクリームヒルトに対して、ハーゲンはまたもや次のように答える。

Wir trugen allzu schwer an unserm Eisen,
Um uns auch noch mit deinem Gold zu schleppen,
Wer meinen Schild und meinen Panzer wiegt,
der bläst das Sandkorn ab und nicht hinzu. (4053-6)

我々は自分たちの武具でさえも重過ぎたので、
そのうえそなたの黄金まで運ぶことはできなかったのじゃ。
わしの楯と鎧の重さを計ってみたら、
砂粒さえ吹き落として、付け加えたくないくらいなのじゃ。

皮肉に満ちたこのハーゲンの言葉にクリームヒルトも負けてはいない。「では、それを脱いで、私について広間に入ってもらいましょう」(4059-60) と言って武具を取り上げようとする。これに対してハーゲンが答える言葉もまた皮肉に満ちている。

Nein, Königin, der Waffen nehm ich mit,
Dir ständen Kämmrerdienste übel an！　(4061-2)

いや、王妃様、武器は自分で持ちまする。
そなたに小間使の世話をしてもらっては申し訳ない！

ハーゲンがどうしても武器を手渡す意志のないことを見て取ったクリームヒルトは、「誰か裏切り者がいて警告したのであろう」(4066) と言って、その警告者を非難すれば、ディートリヒが警告したのは自分であると名乗り出る。エッツェル王からディートリヒだけには礼を尽くすように言われていたクリームヒルトは、警告者に不平を申し述べることはできても、それ以上の行動に出てディートリヒを罰することはできない。それどころかディートリヒはブルグント族を案内してその場を立ち去るのであり、クリームヒルトはただそのさまを見ていなければならないのである。

こうしてブルグント族はエッツェル王の居城にひとまず落ち着くが、エッツェル王に謁見したハーゲンによると、エッツェル王はとても柔和にもてなしてくれた (4200-1) という。ハーゲンの考えるところでは、エッツェル王は実直であることを誇りとしているので、エッツェル王の意志で自分たちを裏切ることはないであろう (4212-4) が、しかし楽人ヴェルベルなどの様子からも窺い知れるように、足もとは安全ではなく、踏み出すところではどこでもどよめいている (4218-9)。そこでハーゲンはクリームヒルトの陰謀を警戒して、『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、その夜はフォルケールとともに寝ずの番をする。一方、クリームヒルトの方もヴェルベルを連れて小高い階段の上に姿を現して、相手の隙を窺うものの、ハーゲンとフォルケールの姿を見て、ひとま

ず攻撃することを見合わせるのである。

Ⅳ．クリームヒルトとハーゲンの対立――第四幕――

第四幕は第三幕の最終場面に続くものであり、深夜、ハーゲンとフォルケールは寝ずの番をしている。フォルケールはヴァイオリンを奏でながら昔の物語を語り続けている。ハーゲンは依然として腰かけたまま、フォルケールの物語に耳を傾けながら、その内容に関して問いかけをしているうちに、それがニーベルンゲンの財宝にまつわる物語であることを悟る。そうしているところへクリームヒルトが従者たちを連れて階段を降りて来る。フォルケールは立ち上がって王妃に挨拶しようとすると、ハーゲンはそれを押し止どめる。『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、ハーゲンは恐れて立ち上がったと思われるのが嫌なのであり（4349-50)、逆にジークフリートの持ち物であったバルムンクの剣を膝の上に置いてクリームヒルトを煽り立てようとするのである。それどころかハーゲンはクリームヒルトから彼女の夫殺しを訴えられると、とぼけて次のように答える。

・・・Weckt sie auf,
Sie geht im Traum herum. Dein Gatte lebt,
Ich habe noch zur Nacht mit ihm gezecht
Und stehe dir mit diesem guten Schwert
Für seine Sicherheit. (4356-60)

・・・王妃を目覚めさせるのだ。
彼女は夢の中をさまよっていなさる。そなたの夫は存命じゃ。
わしは今宵国王と一緒に宴の席で盃を交わしたばかりじゃ。
この立派な剣にかけて国王の安全は
保証いたしまする。

これに対してクリームヒルトが、「誰のことを言ったのか、知っているくせに、知らぬふりをしている」（4360-2）と怒りを示せば、ハーゲンはさらに続けて嘲けるように言う。

Du sprachst von deinem Gatten,
Und das ist Etzel, dessen Gast ich bin.

Doch, es ist wahr, du hast den zweiten schon,
Denkst du in seinem Arm noch an den ersten?
Nun freilich, diesen schlug ich tot. (4362-6)

そなたは夫じゃと申したが、
それはエッツェル殿で、わしがお世話になっている人じゃ。
いや、確かに、彼は二人目の夫であったな。
そなたは彼の腕の中で最初の夫のことを考えているのかな？
もちろんのことじゃ、最初の夫はわしが殺したのじゃ。

クリームヒルトを嘲りながら、ハーゲンはこのように自らがジークフリートを殺害したことを公然と口にするのである。それどころかハーゲンによる嘲りの言葉はなお続く。クリームヒルトは従者たちに斬りかかるよう命じるが、フン族はバルムンクの剣を抜き放ったハーゲンにおじけづいて攻撃できないままでいる。クリームヒルトから意気地のない奴じゃと言われたヴェルベルは、再度軍勢を率いて攻撃をしかけようとしているところへ、グンター王が騒ぎを聞きつけて、寝間着を着たまま兄弟たちとともに現われる。

クリームヒルトは兄グンターに向かってまずハーゲンの裁判を要求するが、それを拒否されると、次にはハーゲンを自分に引き渡すよう要求する。しかし、グンター王は「彼の運命は我々の運命だ」(4448-9) と言って、きっぱり拒否する。姉クリームヒルトにはこれまで従順だったギーゼルヘアもまた、次のように言って姉を諫める。

・・・Wir häuften ew'ge Schmach
Auf unser Haupt, wenn wir den Mann verließen,
Der uns in Not und Tod zur Seite stand. (4451-3)

・・・我々がこの男を見捨てでもしたら、
我々は永遠の恥辱を頭の上に積み重ねることになります。
彼は死の窮地に立たされても我々に味方してくれたのですから。

このように最も頼りにしていたギーゼルヘアにも助力を拒否されたクリームヒルトは、今や兄弟をもハーゲンと同類の仇敵と見なして、ハーゲンの首を取るためには、「たとえ百人の兄弟を打ち倒すことになろうとも、それを実行し、

自分は誠実のためにのみ誠実を破ったのだということを世間に知らせてやる」(4514-7) と言い残して、その場を立ち去って行くのである。

翌朝、クリームヒルトは夥しい宝石をばらまいて、ヴェルベルをはじめとする多くのフン族の兵士たちを奮い立たせる。祈祷の時刻となって、ブルグント族が礼拝堂に向かう途中、フォルケールが槍を投げつけて一人のフン人を刺し殺したことから、双方の兵士たちが騒ぎ立った。そこへエッツェル王が現われて、フン族の兵士たちに武器を捨てるよう命じる(4679)。エッツェル王は深夜の騒動をディートリヒから聞き知ってクリームヒルトの企みにようやく気づいたのであるが、彼としては客人に危害を加えることはできない。エッツェル王の介入により、この場はひとまず何事も起こらずに、ブルグント族はディートリヒの案内で礼拝堂に入って行く。その間、クリームヒルトはリューデゲールに誓いを思い出させる (4703)。それを聞いたエッツェル王自身も、リューデゲールが誓ったことは自分も守る (4706) が、しかし、ブルグント族が客人である限りは少しの危害を加えることはできない (4722-3) と言う。彼らが客人でなくなったら、神聖を汚すことになる(4725) と言って、エッツェル王は王妃を教え諭すのである。

このようにエッツェル王はヘッベルの戯曲では『ニーベルンゲンの歌』においてよりもかなり温和な人物として描かれているのであるが、しかし、このような柔和な国王もまた昔の蛮人に戻ることとなる。そのきっかけとなったのが、その夜に大広間で催された晩餐における出来事である。クリームヒルトは王子オトニートを宴の席に呼び出させて、客人に紹介する。やがてその王子がハーゲンに紹介されて、その腕に抱かれると、ハーゲンは「この子は長生きしないだろう」(4942) と言い出して、次のように続ける。

Ihr wißt, ich bin ein Elfenkind und habe
Davon die Totenaugen, die so schrecken,
Doch auch das doppelte Gesicht. Wir werden
Bei diesem Junker nie zu Hofe gehn. (4943-6)

皆様もご存じの通り、わしは妖精の子で、
そのため怖い死人のような目をしているが、
しかしその目の知力は二倍だ。我々は
この貴公子の宮廷に伺候することはあるまい。

このような言葉を聞いたクリームヒルトが皮肉に満ちた言葉を返しているうちに、ダンクヴァルトが鎧兜を血だらけにして現れ、グンター王に外のブルグント勢が一人残らず討ち取られたことを報告する（4953-5）や否や、ハーゲンは起立して剣を抜き、王子オトニートの首を斬り落としたのである。さすがのエッツェル王もこの仕打ちには我慢がならずに、昔の蛮人に立ち返ってブルグント族に戦いを宣言し、ここに両族あげての戦いが始まるのである。

V．ブルグント族とフン族の戦い――第五幕――

こうして戦いはもはやクリームヒルトとハーゲンとの戦いではなく、フン族とブルグント族との戦いとなる。この両族あげての戦いに関しても、展開は『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じである。すなわち、大広間には火がつけられて、真っ赤に燃え続けたあとは煙に包まれている。この国にやって来たブルグントの兵士たちは七千人のフン族とともに倒れてしまったが、ハーゲンをはじめ、ブルグントの国王たちは辛うじて大広間の中から逃れて出口のところに辿り着く。ハーゲンは喉が渇いたら死人の血を啜って喉の渇きをいやすがよい（4996-8）と助言する。そこへクリームヒルトが現れ、ハーゲンは野外で堂々と戦ってもらいたいと願い出る（5082）が、彼女はもちろんそれを許さない。そのあとエッツェル王もその場に姿を現すが、大広間に火をつけたのは国王の意志によるものかというハーゲンの質問に対して、エッツェル王は、フン族の戦死者のみならず、「王子の遺骸さえも引き渡してくれなかった」（5089-90）ので、「火葬にしたまでのこと」（5091）と答えてから、はっきりと王妃クリームヒルトに向かっても次のように言う。

> ・・・Stamm um Stamm!
> Sie haben meinen ausgelöscht, sie sollen
> Auch selbst nicht fortbestehn.　　(5101-3)

> ・・・血族には血族をもってじゃ！
> 彼らはわしの一族を消し去ってしまったので、
> 彼ら自身にも生き延びさせてはならない。

温和なエッツェル王も今や昔の蛮人に返って、ブルグント一族を全滅させようとしていることが明らかである。

このエッツェル王の参戦によって両族の板挟みとなってこのうえない苦しみ

を味わわねばならないのがリューデゲールである。このリューデゲールについても、悲劇的状況は『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同様である。すなわち、リューデゲールは一人のフン族の兵士を追い立てて登場すると、その兵士をこぶしでもって殴り殺してしまう。エッツェル王がそれを咎めると、リューデゲールはその者に口先だけの家来に過ぎないと罵られたので、懲らしめたのだと言う。それを聞いたクリームヒルトは、次のように言ってリューデゲールを責める。

Herr Rüdeger, die Strafe war zu hart,
Denn viele, wenn nicht alle, denken so,
Und eine beßre Antwort wär's gewesen,
Wenn Ihr sogleich das Schwert gezogen hättet,
Um auf die Nibelungen einzuhaun. (5119-22)

リューデゲール殿、その罰は厳し過ぎたようだ。
皆とは申しませぬが、大方の者はそのように考えているのだから。
返答としては、そなたがすぐにでも剣を引き抜いて
ニーベルンゲン族に向かって殴り込んだ方が
ずっとよかったのではありますまいか。

自分が彼らをこの国に案内したことをリューデゲールが口にすれば、エッツェル王は「案内した当人であるからこそ彼らを片づけるのも当然なのだ」(5125)と言う。さらにクリームヒルトからかつての誓いを催促され、助力を請われるが、リューデゲールはそれだけは容赦願いたいと答える。ギーゼルヘルは娘婿となる人でもありからである。とはいえ、王妃に誓った誓いもないがしろにすることはできない。ここに至ってリューデゲールはこのうえない苦境に陥るのである。

So schwer, wie ich, ward noch kein Mensch geprüft,
Denn was ich tun und was ich lassen mag,
So tu ich bös und werde drob gescholten,
Und laß ich alles, schilt mich jedermann. (5261-4)

私のようにつらいことを経験した人はおりますまい。
私は何をしても、また何もしないでいても、

悪いことをしたこととなり、ひどく咎められるのですから。
すべてを見捨てても、私は皆に咎められるのです。

この苦悩は『ニーベルンゲンの歌』における同様の場面の苦悩（2153-4）に由来するものであろう。両族の板挟みとなって嘆くリューデゲールは、もはや破滅を覚悟してブルグント族に立ち向かうしかない。『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、リューデゲールは家来を引き連れてブルグント族と戦う。『ニーベルンゲンの歌』においてリュエデゲールはゲールノートと相討ちで倒れてしまう（2221）が、このヘッベルの戯曲ではリューデゲールはダンクヴァルトと相討ちで倒れる（5401）こととなっている。この戦いでゲーレノートもギーゼルヘアも倒れてしまうが、この二人が誰によって倒されたかは明らかにされていない。いずれにしても今やブルグント族側で生き残っているのはグンター王とハーゲンの二人だけである。

この二人を捕らえてクリームヒルトに引き渡す役目を果たす人物が、『ニーベルンゲンの歌』においてと同様にディートリヒである。ただこのヘッベルの戯曲ではディートリヒはかなり加筆を施されて、エッツェル王に死ぬまで奉仕する人物として描かれている。武術の師匠ヒルデブラントから「エッツェル王に誓っていた七年の奉公の期限はすでに過ぎている」(5343-4) と言われても、ディートリヒはエッツェル王に向かって次のように自らの立場を明らかにする。

・・・So war's, mein Herr und König,
Doch weiß mein alter Waffenmeister nicht,
Daß ich's im stillen neu beschworen habe,
Indem er sprach, und diesmal bis zum Tod. (5346-9)

・・・その通りでございました、わがご主人の国王様。
しかし、私の武術の師匠は話しているうちに、
私が静かに改めて誓ったということを
知らないのです。このたびは死ぬまでの奉公と誓ったのです。

このように自らの立場を明らかにしてディートリヒは、参戦を決意し、しまいにはグンター王とハーゲンを捕らえてクリームヒルトに引き渡すのである。こうしてついに仇敵ハーゲンを目の前にしたクリームヒルトは、まず財宝のあり

かを尋ねると、ハーゲンは『ニーベルンゲンの歌』においてとほぼ同様の返事をする。

Als ich den Hort versenkte, mußt ich schwören,
Ihn keiner Menschenseele zu verraten,
Solange einer meiner Kön'ge lebt. (5435-7)

財宝を沈めたとき、わしは誓ったのじゃ。
わしの国王様たちが一人でも生きている限りは、
誰にも財宝のありかは明かさないと。

この言葉を聞いたクリームヒルトは、密かに一人のフン族の兵士に命じて、グンターの首を刎ねて持って来させる。クリームヒルトがその首をハーゲンに見せて財宝のありかを催促すると、ハーゲンは自らが思っていた通りの結末になったことを喜びながら、次のように言う。

Da ist das Ende! Wie ich's mir gedacht!
Unhold, ich hab dich wieder überlistet,
Nun ist der Ort nur Gott und mir bekannt,
Und einer von uns beiden sagt's dir nicht. (5444-7)

さあ、結末じゃ！わしの考えていた通りになったぞ！
鬼女よ、わしはまたお前の裏をかいてやった。
今やそのありかを知るのは神とこのわしだけじゃ。
我々二人のうちどちらもお前にそれを教えはしない。

最後まで抵抗するハーゲンのこの言葉が『ニーベルンゲンの歌』最終場面におけるハゲネの同様の言葉（2371）に由来するものであることは、もはや言うまでもあるまい。ハーゲンのこの反抗的な言葉を聞いたクリームヒルトは、ハーゲンの腰からバルムンクの剣を取り上げて、それでもってハーゲンを斬り倒した。この惨い仕打ちに怒ったヒルデブラントはクリームヒルトを成敗する。『ニーベルンゲンの歌』と同じ展開であるが、ヘッベルの戯曲ではそのあとの結末が著しく異なっている。エッツェル王はすべてのことに嫌気がさして、王位をディートリヒに譲る決意を述べるのである。するとディートリヒはエッ

ツェル王の申し出をしかと神の御名において引き受けることを承諾し、戯曲『ニーベルンゲン』三部作の最終幕が下りるのである。

結び

以上のように見てくると、ヘッベルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作には主な素材として中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』が用いられていることが明らかであるが、しかし、オトフリート・エーリスマンも指摘しているように、ヘッベルにとって大切なのはテクストに密接に依存することではなく、「テクストの精神からの作品化」[11]である。ヘッベルは、すなわち、ところどころで改作を施しながら中世英雄叙事詩の「精神」を論理学的・心理学的に発展させたのである。言い換えるならば、彼はあらすじを首尾一貫して人間的に動機づけたと言えよう。それにもかかわらず彼の戯曲の中には現に「神話的土台」もあることは確かである。その神話的人物の代表がジークフリートとブルンヒルトである。まずジークフリート像については、ヘッベルは『ニーベルンゲンの歌』においてハゲネが語るジーフリトの英雄譚のほかに、北欧のエッダ・サガに伝承されている英雄譚を用いてジークフリート像を構築していると言えるが、しかし、もう一人のブルンヒルト像に関してはかなり自由な創作が施されて、ドイツの伝承にも北欧の伝承にも見出されない新たな要素が盛り込まれている。すなわち、ブルンヒルトは神々の住むヘクラの山から一人の老人によって乳母フリッガに預けられた人物として登場し、彼女の顔にはルーネ文字が書き込まれており、彼女のすることが吉凶のしるしになったという。このブルンヒルトの魔力については、第二部『ジークフリートの死』第四幕第9場でハーゲンによっても語られている。ハーゲンはブルンヒルトがしきりにジークフリートの命を取りたいと思っている理由をグンター王に推測して言うには、彼女の憎しみには恋というものが根底にある（2162-3）が、しかしそれは男と女を結びつける恋ではない（2164-5）、それは「魔力」（Zauber, 2165）というもので、彼女はその魔力によって自らの一族を保とうとしている（2166）という。そしてその魔力を解くものは死だけである（2169）と、ハーゲンは説明するのである。ジークフリート暗殺後のブルンヒルトについては、第三部『クリーム

---

11) Vgl. Otfrid EHRISMANN: Das Nibelungenlied in Deutschland. Wilhelm Fink Verlag München 1975. S. 252.

ヒルトの復讐』第三幕第1場で使者ヴェルベルによってクリームヒルトに報告されており、それによると、ブルンヒルトはジークフリートの墓所に入って（3815)、棺のそばにしゃがみ込んで(3820)、目には涙をいっぱい溜め、爪で自分の顔や棺の板をかきむしったりしている（3821-3）という。このようなブルンヒルト像には北欧の神話・文学が作用していることは明らかである。ヘッベルの戯曲においてはこのようにジークフリートとブルンヒルトの二人は純粋に人間的な世界を超越しており、『ニーベルンゲンの歌』とは別の新しい次元にあると言ってもよいであろう。

このジークフリートとブルンヒルトの「神話的時代」に対立しているのが、ハーゲン、グンター王、クリームヒルト及びエッツェル王に代表される「異教的時代」とディートリヒ及び司祭によって具象化されている「キリスト教的時代」である。ヘッベルの作品ではこの三つの時代が衝突・対立している点で、ヘッベルは中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の単なる翻訳者ではなく、それ以上の存在である。そして否定されえないことは、ヘッベルは『ニーベルンゲンの歌』においてよりもキリスト教的特徴をより強くしているということである。そのことは第三部『クリームヒルトの復讐』第四幕第20場で一人の巡礼者が登場していることからも明らかである。すなわち、その巡礼者は以前は「立派な公爵」であったが、今は乞食の姿で歩き回って、贖罪者の生活を送っているという役柄である。また司祭にもキリスト教的なものが強調されている。『ニーベルンゲンの歌』では第25歌章でしか役割を演じていないその司祭は、ヘッベルの戯曲ではすでに第二部『ジークフリートの死』において登場している。第四幕第8場において司祭は王妃の母にキリスト教の教えを告げ、いかにして異教徒の彼が突然キリスト教に改宗して僧侶となったかについて語っているのである。そして彼はそのあと第五幕第9場でクリームヒルトに向かって「十字架で赦した人のことを考えてごらん」と言って、復讐を断念させようと努めているのである。しかし、この巡礼者と司祭以上にヘッベルがキリスト教的なものを強調しているのはディートリヒという人物においてである。この人物は『ニーベルンゲンの歌』においても理想的な人物として描かれているが、ヘッベルは『ニーベルンゲンの歌』にもましてこのディートリヒをキリスト教的な支配者として描いていると言える。すなわち、第三部『クリームヒルトの復讐』最終場面（第五幕第14場）で、エッツェル王は自らの国をディートリヒに委ねてこう言う。「ディートリヒ殿、この身の冠をお取りくだされ。そして貴殿がこの世を背負っていってくだされ」この言葉に対してディートリヒは三部作最後の言葉として「十字架に消えたる者の名代として、承知いたした」と

答えるのである。これは『ニーベルンゲンの歌』とはまったく異なる結末である。ヘッベルの戯曲は破局に終わるのではなく、異教に対するキリスト教の勝利に終わっていると言ってもよく、作者はここで「歴史は破滅を越えて再三再四新しい意味深い世界へと進む」[12]ということを確信しているのであり、ここにヘッベルのニーベルンゲン世界の特質があると結論づけることができよう。

12) Vgl.Werner HOFFMANN: Das Nibelungenlied. Verlag Moritz Diesterweg Frankfurt am Main 1987. S. 119. なお、本稿執筆にあたってこのヴェルナー・ホフマンの研究書に負うところが多かったことを付記しておく。